

# 有田・小田部40

— 有田遺跡群第205次調査報告書 —



2006  
福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。本市は原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めております。

今回報告いたしますのは、福岡市西部を占める早良平野の洪積台地に立地する有田遺跡での発掘調査記録です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけにとどまらず、市民各位の埋蔵文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた地権者をはじめ、御支援と御指導をいただいた関係各位に対し深く感謝いたします。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木とみ子

# 本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境.....	2
1. 遺跡の位置と立地 .....	2
2. 遺跡の歴史的環境 .....	2
第Ⅲ章 調査の記録.....	5
1. 試掘調査の概要 .....	5
2. 調査の概要 .....	5
3. 遺構と遺物 .....	6
(1) 弥生時代 .....	6
(2) 律令時代 .....	20
第Ⅳ章 小結 .....	25

# 挿図目次

Fig. 1 調査地位置図 (1/200,000).....	1
Fig. 2 調査地周辺遺跡分布図 (1/25,000) .....	3
Fig. 3 遺跡調査次数位置図 (1/7,500) .....	4
Fig. 4 調査地周辺地形図 (1/300) .....	5
Fig. 5 第Ⅱ調査区櫛棺墓 (南から) .....	6
Fig. 6 弥生時代遺構配置図 (1/150) .....	7
Fig. 7 1号櫛棺墓SK01実測図 (1/20) .....	8
Fig. 8 1号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10).....	8
Fig. 9 2号櫛棺墓SK02実測図 (1/30) .....	9
Fig. 10 2号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10).....	9
Fig. 11 3号櫛棺墓SK03実測図 (1/30) .....	10
Fig. 12 3号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10).....	10
Fig. 13 4号櫛棺墓SK04実測図 (1/30) .....	11
Fig. 14 4号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10).....	11
Fig. 15 5号櫛棺墓SK05実測図 (1/20) .....	12
Fig. 16 6号櫛棺墓SK06実測図 (1/20) .....	13
Fig. 17 6号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10).....	13
Fig. 18 7号櫛棺墓SK07実測図 (1/20) .....	14
Fig. 19 7号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10).....	14
Fig. 20 8号櫛棺墓SK08実測図 (1/30) .....	15
Fig. 21 8号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10).....	15
Fig. 22 9号櫛棺墓SK09実測図 (1/20) .....	16
Fig. 23 10号櫛棺墓SK10実測図 (1/30) .....	17
Fig. 24 10号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10) .....	17
Fig. 25 11号櫛棺墓SK11実測図 (1/30) .....	18
Fig. 26 11号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10) .....	18
Fig. 27 12号櫛棺墓SK12実測図 (1/20) .....	19
Fig. 28 12号櫛棺墓櫛棺実測図 (1/10) .....	19
Fig. 29 律令時代遺構配置図 (1/150) .....	21
Fig. 30 墓SA01実測図 (1/40) .....	22
Fig. 31 振立柱建物SB01実測図 (1/40) .....	23
Fig. 32 振立柱建物SB02実測図 (1/40) .....	24
Fig. 33 建物・施設配置復元図 (1/300) .....	25

## 図版目次

- PL.1 調査地周辺航空写真（1947年 昭和22年）  
 PL.2 調査地周辺航空写真（1964年 昭和39年）  
 PL.3 調査地周辺航空写真（1972年 昭和47年）  
 PL.4 調査地周辺航空写真（1981年 昭和56年）  
 PL.5 調査地周辺航空写真（2001年 平成13年）  
 PL.6 (1) 第Ⅰ調査区全景（西から）  
     (2) 第Ⅰ調査区遺構墓塚検出状況（西から）  
 PL.7 (1) 第Ⅰ調査区遺構墓塚検出状況（南から）  
     (2) 第Ⅰ調査区遺構墓塚検出状況（西から）  
 PL.8 (1) 1号遺構墓SK01検出状況（南東から）  
     (2) 1号遺構墓SK01遺構検出状況（南東から）  
     (3) 1号遺構墓SK01墓塚検出状況（南東から）  
 PL.9 (1) 2号遺構墓SK02検出状況（南東から）  
     (2) 2号遺構墓SK02遺構検出状況（南東から）  
     (3) 2号遺構墓SK02墓塚検出状況（南東から）  
 PL.10 (1) 3号遺構墓SK03検出状況（東から）  
     (2) 3号遺構墓SK03遺構検出状況（東から）  
     (3) 3号遺構墓SK03墓塚検出状況（東から）  
 PL.11 (1) 4号遺構墓SK04検出状況（東から）  
     (2) 4号遺構墓SK04遺構検出状況（東から）  
     (3) 4号遺構墓SK04墓塚検出状況（東から）  
 PL.12 (1) 5号遺構墓SK05検出状況（南東から）  
     (2) 5号遺構墓SK05遺構検出状況（南東から）  
     (3) 5号遺構墓SK05墓塚検出状況（南東から）  
 PL.13 (1) 6号遺構墓SK06検出状況（東から）  
     (2) 6号遺構墓SK06遺構検出状況（東から）  
     (3) 6号遺構墓SK06墓塚検出状況（東から）  
 PL.14 (1) 7号遺構墓SK07検出状況（西から）  
     (2) 7号遺構墓SK07遺構検出状況（西から）  
     (3) 7号遺構墓SK07墓塚検出状況（西から）  
 PL.15 (1) 8号遺構墓SK08検出状況（北西から）  
     (2) 8号遺構墓SK08遺構検出状況（北西から）  
     (3) 8号遺構墓SK08墓塚検出状況（北西から）  
 PL.16 (1) 9号遺構墓SK09検出状況（東から）  
     (2) 9号遺構墓SK09遺構検出状況（東から）  
     (3) 9号遺構墓SK09墓塚検出状況（東から）  
 PL.17 (1) 10号遺構墓SK10検出状況（北西から）  
     (2) 10号遺構墓SK10遺構検出状況（北西から）  
     (3) 10号遺構墓SK10墓塚検出状況（北西から）  
 PL.18 (1) 11号遺構墓SK11検出状況（東から）  
     (2) 11号遺構墓SK11遺構検出状況（東から）  
     (3) 11号遺構墓SK11墓塚検出状況（東から）  
 PL.19 (1) 12号遺構墓SK12検出状況（東から）  
     (2) 12号遺構墓SK12遺構検出状況（東から）  
     (3) 12号遺構墓SK12墓塚検出状況（東から）  
 PL.20 (1) 1号木棺墓SK13検出状況（南から）  
     (2) 1号木棺墓SK13木棺検出状況（東から）  
     (3) 1号木棺墓SK13木棺検出状況（南から）  
 PL.21 1~4号遺構墓遺構  
 PL.22 6~8・10号遺構墓遺構  
 PL.23 11・12号遺構墓遺構  
 PL.24 (1) 第Ⅰ調査区全景（西から）  
     (2) 標高SA01検出状況（北から）  
 PL.25 (1) 振立柱建物SB01・02検出状況（東から）  
     (2) 振立柱建物SB01・02検出状況（南から）  
 PL.26 (1) 振立柱建物SB01検出状況（南から）  
     (2) 振立柱建物SB02検出状況（南から）  
 PL.27 振立柱建物SB01柱穴半蔵状況

## 凡例

- 本書は福岡市教育委員会が福岡市早良区小田部二丁目155-1、156地内の個人住宅付共同住宅建設工事予定地において、2002年度（平成14年度）に実施した有田遺跡群第205次調査の発掘調査報告書である。
- 本書における調査の題目は次のとおりである。
- 遺構実測図に付した座標値は平面直角座標系第Ⅱ座標系（日本測地系）による座標値である。方位は磁北で、真北に対して $8^{\circ}18'$ 西偏する。
- 本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にS A (櫛)、S B (建物)、S K (遺構等)、S X (その他)などの遺構の性格を示す分類記号を付した。
- 本書の遺構遺物の撮影および遺構の実測は纏本正志、遺物の実測は琳原俊行、纏本、トレースは末次由紀恵がおこなった。
- 本書の執筆・編集は纏本正志が担当し、編集作業において中野千子子の協力を受けた。
- 発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

遺跡名	調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地	面積	調査期間
有田遺跡群	205次	0256	ART-205	早良区小田部二丁目155-1, 156	346m <sup>2</sup>	2003. 1. 20~2003. 2. 21

# 第Ⅰ章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

2002年（平成14年）5月9日、土地所有者の池田清一郎氏より福岡市教育委員会へ福岡市早良区小田部二丁目155-1、156地内における埋蔵文化財事前審査願いが提出されたが、当該地域は小田部地区台地の中央に位置する埋蔵文化財包蔵地域の「有田遺跡」として登録されている範囲内であった。さらに当該地に北接する地点では1985年に発掘調査（第102次調査）が行われ、3間×3間の縦柱掘立柱建物（1号建物）が1棟と建物の東側に棟筋を同じくする3本組の柵列などが発見されていることや、埋蔵文化財課が2002年11月14日に現地試掘調査を行った結果においても地表下30~45cmの明褐色のローム面において小溝、柵列に関連すると考えられる小穴を検出したことからも当該地においては飛鳥・奈良時代の遺跡の存在が強く推定され、計画されている開発事業が実施された場合には遺跡に影響が出ることが確実となった。

このため、これらの試掘調査結果を依頼者に回答するとともに文化財の取り扱いについて協議を行った結果、建設工事に先立って埋蔵文化財発掘調査を実施することとし、土地所有者を委託者、福岡市長を受託者とする契約が平成14年12月13日に締結された。発掘調査は平成14年度、資料整理は平成17年度に実施した。

## 2. 調査の組織

- (1) 委託者 池田清一郎
- (2) 調査主体 福岡市教育委員会

【平成14年度調査時】		【平成17年度整理時】	
教育長	生田征生	植木とみ子	
文化財部長	堺徹	山崎純男	
埋蔵文化財課長	山崎純男	山口謙治	
調査第2係長	田中壽夫	池崎謙二	
調査・整理担当	瀧本正志	瀧本正志（埋蔵文化財センター）	
試掘調査担当	久住猛雄		

（調査整理補助）上野裕子 宮次由紀恵 長浦美美子 中間千衣子 中村智子 持原良子 山野祥子



Fig. 1 調査地位置図 (1/200,000)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 遺跡の位置と立地

本調査地の位置する有田遺跡群は、福岡市西部の早良平野を南北に貫流する室見川下流の東岸に位置する洪積台地上に広がる遺跡群の呼称である。この須玖火山灰の堆積台地は、標高15m前後を測る独立中位段丘で、浸食により八手状にいくつにも分岐した地形を呈し、南北約1.7km、東西0.7kmを測る。浸食を受けた台地の地形は、東西両方向からの大規模な谷の侵入により中央部が極端に狭くなり、大きく北側と南側の二地区に分断される。北側地区は北東—南西方向に軸を持つ丘陵から北西方向へ幾筋もの小段丘が派生している。南側地区は「Y」字形を呈し、交点付近を中心に広がりを見せる。

本調査の第205次調査地は、北側地区南部中央に位置し、本来の丘陵尾根筋にある。そのため、古墳時代以降の地形改削を経た現状においても、調査地を含む周辺は僅かに西側に向かって傾斜を呈している。

### 2. 遺跡の歴史的環境

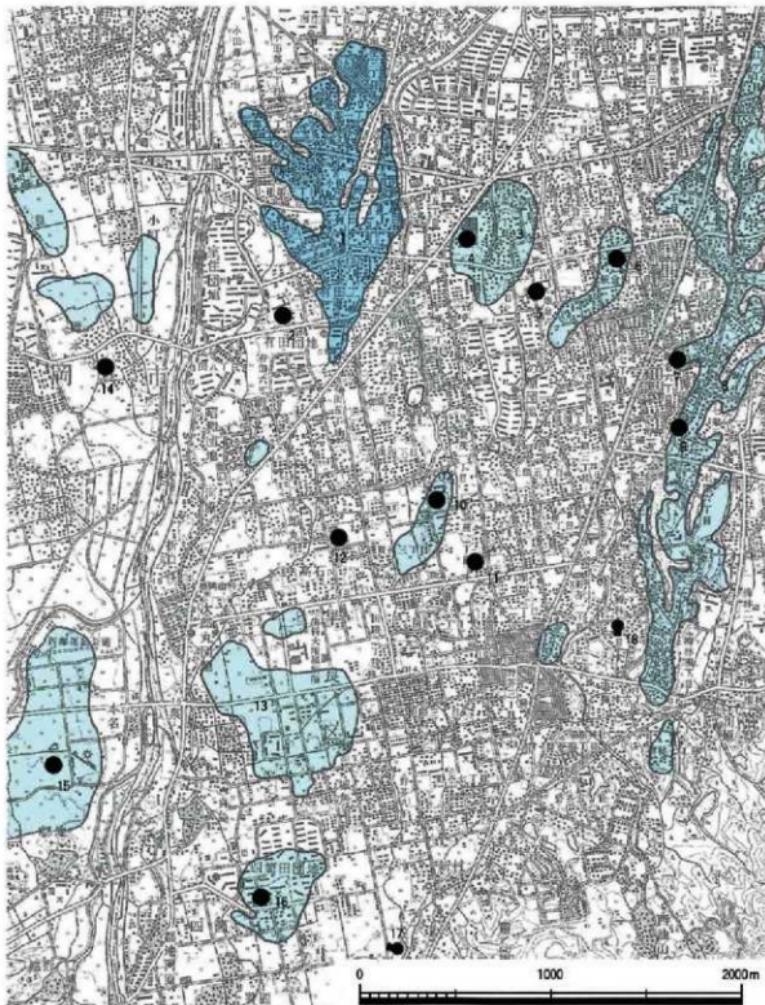
有田遺跡群の調査は、同地域における区画整理事業に先だって1967年から九州大学によって行われ、以降は専用住宅建設を中心とした開発に対応して福岡市教育委員会による緊急調査が実施されており、2005年度までに220次を数えるまでになった。これまでの調査では、旧石器時代から中世に至る幅広い遺構・遺物が発見されており、以下に概観してみる。

旧石器時代は、後生の大規模な削平による影響からか、遺物についてはローム層からナイフ形石器・ポイント・台形石器が出土しているものまとまりを欠き、遺構についても明確なものは確認されていないことなどから、当時の状況を明らかにするには至っていない。しかしながら、当台地上における人々の生活は明らかであることから、今後の調査の進展を待ちたい。

縄文時代の状況についても全容は不明であるが、台地南側地区の西方にのびる支脈上の第5次・第116次調査において中期～後期の貯蔵穴群が発見されている。また、遺跡群の南西に位置する有田七反田前遺跡、現在の有住小学校建設に伴う発掘調査では流路内から凸帯文土器などが出土し、終末期の当地域における初期船作農耕の存在を示している。

弥生時代における台地の様相は、前期～中期において活発な活動状況を反映する遺構や遺物が台地全体において検出されているが、後期には活動規模は極めて縮小している。代表的な前期の遺構として、南側台地の中央部に位置する第2次・45次・54次・77次調査では長径300m、短径200mの楕円形を呈する環濠遺構の存在が指摘されている。また、前期を中心とした豪奢墓が数多く検出されている。これら集落の活性度の状況が極めて高いものであったこと、すなわち有力集落の存在を示しているのが豪奢の副葬品である銅矛や銅鏡であり、多くの銅製品鎧型の出土であろう。

古墳時代には台地の北側地区を中心に大型円墳が築造され、当地域における有力首長層が確立されるとともに律令期における早良地域の中心地となる政治・経済的基盤の形成が整われようとしていた。これらを示す遺構としては本調査も該当する区画を有する大規模な居館や倉庫群であり、第189次調査で確認された掘立柱建物群の早良郡衙へと繋がるものである。



- |            |             |           |            |           |
|------------|-------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 有田遺跡群   | 2. 有田七田前遺跡  | 3. 原遺跡群   | 4. 原談儀遺跡   | 5. 原深町遺跡  |
| 6. 飯倉原遺跡   | 7. 飯倉唐木遺跡   | 8. 飯倉遺跡群  | 9. 干隈古墳    | 10. 免遺跡群  |
| 11. 野芥大歯遺跡 | 12. 次郎丸高石遺跡 | 13. 田村遺跡群 | 14. 橋本根田遺跡 | 15. 古武遺跡群 |
| 16. 四箇遺跡群  | 17. 拝塚古墳    | 18. 梅林古墳  |            |           |

Fig. 2 調査地周辺遺跡分布図 (1/25,000)

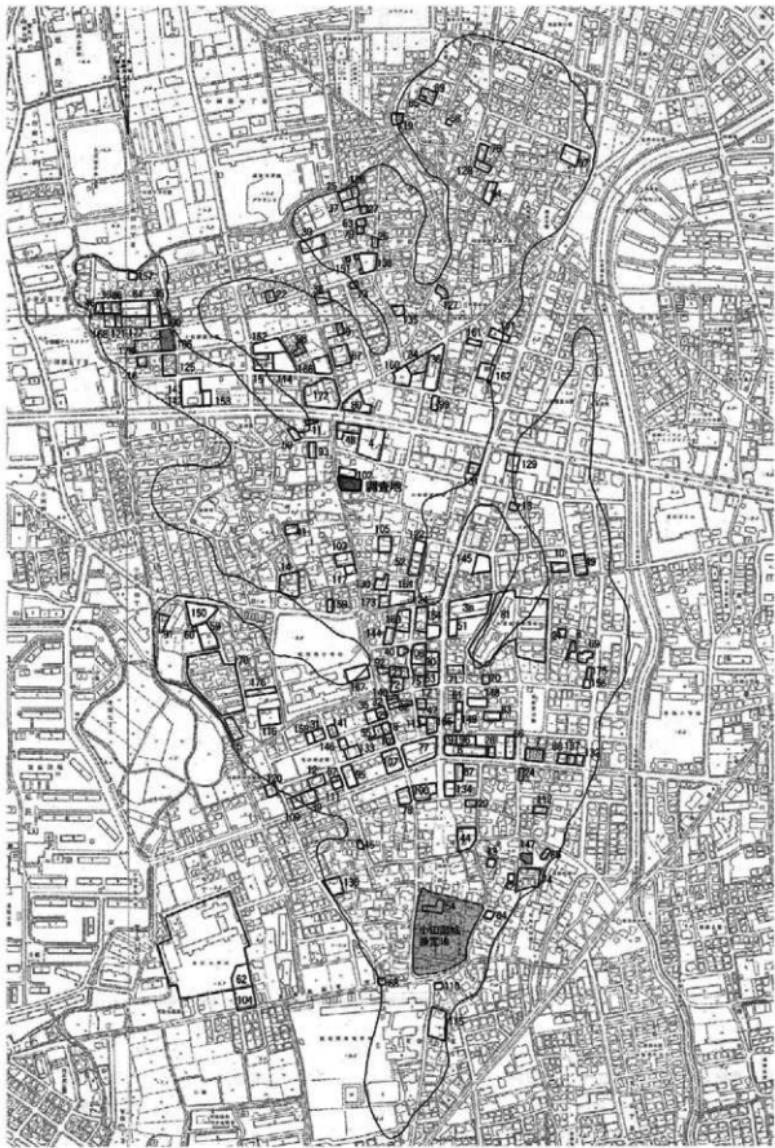


Fig. 3 進跡調査次数位置図 (1/7,500)

## 第Ⅲ章 調査の記録

### 1. 試掘調査の概要

試掘調査は2002年11月14日に実施した。調査方法は、申請地の東半部中央に幅1m、長さ15mのトレーナーを東西方向に設定して重機で掘り下げるもので、トレーナーが本調査地に北接する第102次調査地で検出された柵列の延長線上を横断するように設定した。

遺構検出は地表下30~45cmに位置する地山の明橙褐色ローム層（鳥栖ローム）において行った。その結果、トレーナー全体において旧住宅基礎建設時の攪乱が及んでいるものの、埋土が褐色土で南北方向に走行すると考えられる狭小な溝と覆土が黒褐色土で径30cmほどを測る柱穴とを検出した。遺物の出土は皆無で、先の遺構の時期について積極的年代を知る手がかりを得ることはできなかった。ただ、土層や遺構の位置などから小溝は中世、柱穴は古墳時代～奈良時代と推定された。結果としては未試掘地域において想定されない遺構が数多く発見されたが、本来の試掘調査ではトレーナーを対象範囲全域に設定するべきで、試掘調査担当者の慢心と怠慢とを指摘されても情状の余地はない。

### 2. 調査の概要

調査では、調査区を調査対象地における排土置場の確保の問題から東西の二区画に分区し、東側を第Ⅰ調査区、西側を第Ⅱ調査区とした。調査は2003年1月20日に第Ⅰ調査区から着手、同年2月21日に現場における調査の全てを終了した。

調査で検出した遺構は、試掘調査では明瞭な遺構の検出は認められなかったが、弥生時代前期～中期の豪棺墓12基・木棺墓1基、律令期の柵列1条と掘立柱建物2棟である。

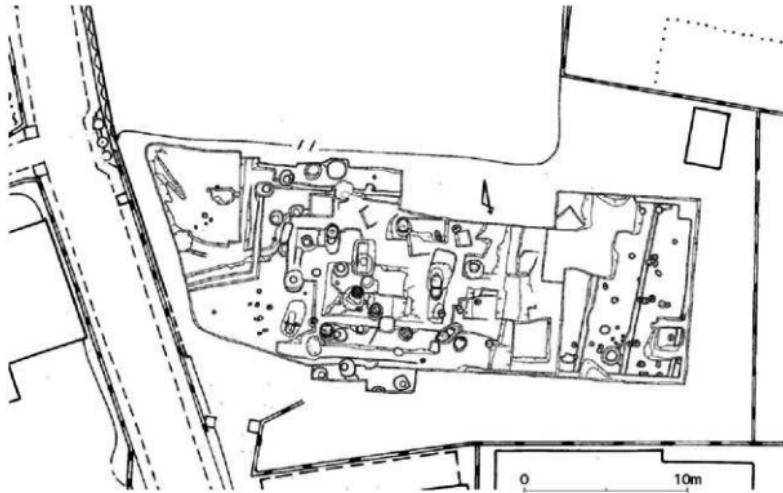


Fig. 4 調査地周辺地形図 (1/300)

### 3. 遺構と遺物

遺構は調査区の中央部～西半部に集中して残存していた。遺構の種類は、弥生時代前期～中期の壇相墓12基・木棺墓1基、律令期の柵列1条と掘立柱建物2棟である。

#### (1) 弥生時代

弥生時代の遺構としては1基の木棺墓と12基の壇相墓がある。木棺墓・壇相墓の時期は大きく弥生時代前期末、中期、後期初の三時期に分かれる。壇相の型式は単棺木蓋式の他に、上蓋に蓋や鉢を用いた複棺接合式、複棺呑口式である。これらの遺構は調査地の中央部で集中した状態で発見されたものの、遺跡が丘陵背上に位置する関係から地域の区画整理事業や家屋建設の基礎工事における削平の度合いを強く受けたため、総じて遺構の残存状況は悪い。遺物は壇相墓の棺に使用されている壺形土器の以外には顕著なものは認められない。先述したように遺跡が強い削平を受けた影響は壇相墓も避けがたく、したがって壇相の上位部が削平による破損がひどく、全形を知りうる例は少ない。

#### 木棺墓 (SK)

1号木棺墓SK13 (Fig.4～6 PL.20)

組み合せ式箱形木棺が主体部の弥生時代前期と推定される木棺墓である。調査区中央部、壇相墓SK10の北2mに位置し、掘立柱建物SB01の南東隅柱位置と重複することから、木棺墓南半部は破壊を受けている。墓壙は、平面形が隅丸長方形を呈して垂直に掘り下げられている。全長2.15m、幅1.36m、深さ0.7mを測る。主軸は北北東～南南西を呈し、磁北より東へ18°偏する。規模は全長1.7m・幅0.6mが復元される。副葬品は認められない。

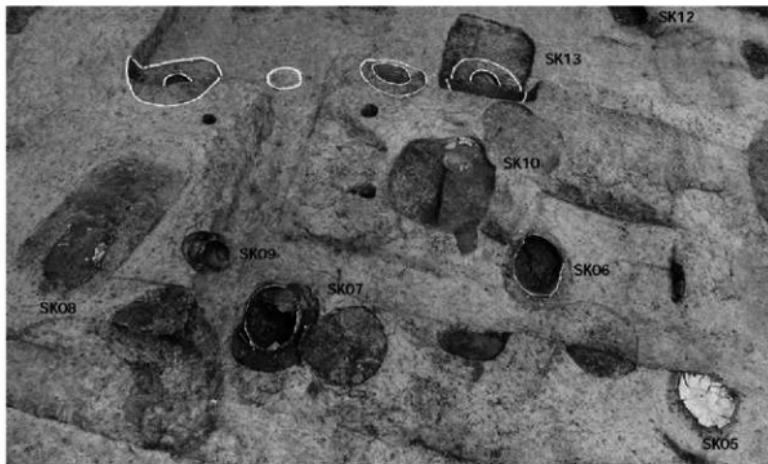


Fig. 5 第II調査区壇相墓（南から）

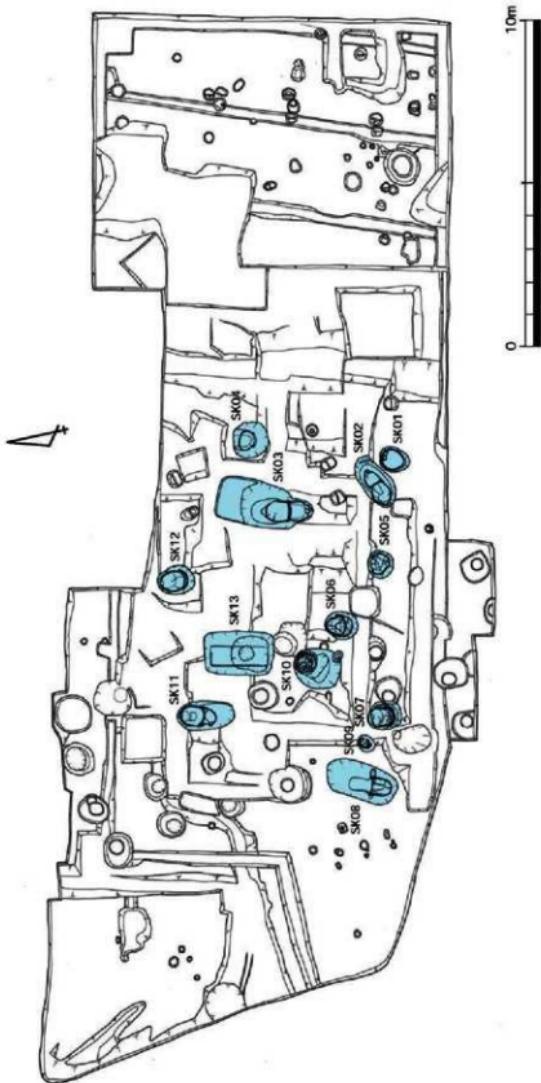


Fig. 6 畜生時代遺跡配置図 (1/150)

## 喪 棺 墓 (SK)

1号喪棺墓SK01 (Fig.6~8 PL.6~8,21)

【概 要】調査区中央部南辺、喪棺墓SK02の南東1mに位置する弥生時代前期末に比定される喪棺墓である。後世の削平により喪棺の上部などを欠失し、喪棺の組み合わせ様式については不明である。墓の主軸は北北東—南南西を呈し、磁北より東へ28°偏する。喪棺の埋置角度は55°を測る。

【墓 塚】削平により墓塚の全容は不明であるが、墓塚は喪の外形に沿った卵形で北北東方向に斜行状に掘り込み、底面は梢円形を呈する。残存する上面で長径0.95m・短径0.76m、底部で長径0.79m・短径0.66m、深さ0.51mを測る。

【下 棺】大型の喪形土器で口縁部を欠くが、埋葬時に口縁部を打ち欠いたのか、後生の削平時によるのかは不明である。底部は僅かに上げ底を呈し、直径13cm、器厚5.4cmを測る。胴部は狭小な底部から外反しながら立ち上がり、胴尖部で最大径に達する。胴尖部からは直立しながら立ち上がり、口縁下部まで繋続する。口縁部は欠失して不明であるが、本調査や同時期の遺跡出土喪棺例から検討すると、口縁部は外湾して上面を肥厚化させていたと考えられる。外面の胴尖部と口縁下部にはそれぞれ3条の沈線が巡る。施文は一本の棒状工具によるものである。器面はナデによる仕上げ。胴部最大径62.6cm、胴部器厚1.2cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。焼成は硬質である。

喪内からは板石が確認されたが、喪棺墓の陥没に伴い棺外から流入したものと推定される。この板石が標石的性格を有していた可能性は捨てがたい。

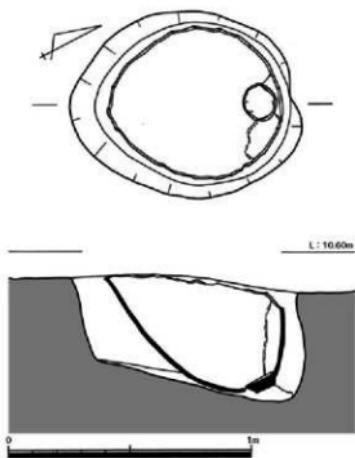


Fig. 7 1号喪棺墓SK01実測図 (1/20)

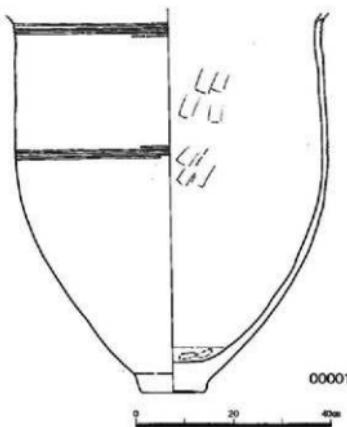


Fig. 8 1号喪棺墓喪棺実測図 (1/10)

## 2号寝棺墓SK02 (Fig.6,9,10 PL.6,7,9,21)

**【概要】** 調査区中央部南辺、寝棺墓SK01の西1mに位置する複棺接合式の寝棺墓で、弥生時代後期初頭に比定される。主軸は東北東－西南西を呈し、磁北より東に65°偏する。棺は上下の蓋とも水平に近い状態に据えており、埋置角度は7°を測る。墓の上半部は近代の建物基礎工事により壊されている。

**【墓 壇】** 墓壇は底部から60cmが残存している。長軸を東北東－西南西に呈する平面形が橢円形の墓壇は、ほぼ垂直に掘削され、上面で長径1.7m・短径0.9m、底部で長径1.3m・短径0.7m、深さ0.7mを測る。底部はほぼ平坦である。

**【上 棺】** 小型の圓形土器で、器形はラグビーボール状を呈する。底部は狭小で直径9cm、器厚1.0cmを測る。胸部は狭小な底部から外反しながら立ち上がり、胸央部上位で最大に達するが、頸部へ向かってすぼまる。口縁はくの字状に折れ曲がり、端部は丸味を呈する。頸部屈曲部の内面には弱い稜線を持つ。頸部外面下には断面形が三角形の凸帯が巡る。口径42.0cm、器高51.0cm、胸部最大径45.2cm、胸部器厚0.6cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、橙灰色～灰褐色を呈する。焼成は硬質である。

**【下 棺】** 中型の圓形土器で、器形は上蓋と同じラグビーボール状を呈する。僅かに上げ底の底部は狭小で直径12cm、器厚0.8cmを測る。胸部は狭小な底部から外反しながら立ち上がり、胸央部で最大に達するが、頸部へ向かってすぼまる。口縁はくの字状に折れ曲がり、端部近くは水平気味である。頸部屈曲部の内面は稜線を呈する。頸部下と胸央部には断面形が三角形の凸帯が巡る。器面調整は刷毛目で、ナデて仕上げている。器面外面の一部にベンガラが残存していることから、当初は全面に塗装していたものが剥離したと考えられる。口径39.6cm、器高77.6cm、胸部最大径59.2cm、胸部器厚0.5~0.7cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。焼成は硬質である。

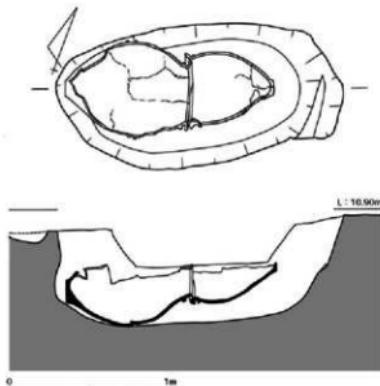
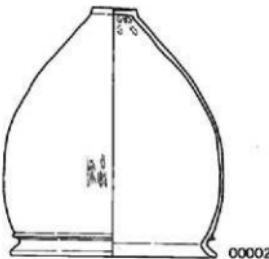


Fig. 9 2号寝棺墓SK02実測図 (1/30)

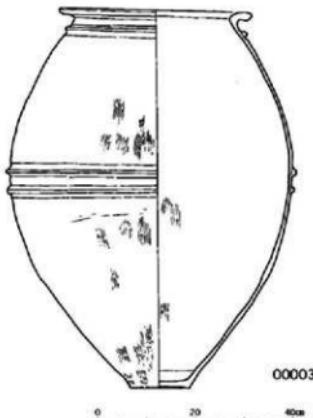


Fig. 10 2号寝棺墓寝棺実測図 (1/10)

## 3号豪棺墓SK03 (Fig.6,11,12 PL.6,7,10,21)

**【概要】** 調査区中央部南辺、豪棺墓SK02の北3mに位置する複棺接合式の豪棺墓で、弥生時代前期末に比定される。主軸は北北東—南南西を呈し、磁北より東に13°偏する。棺は上下の蓋とも僅かに傾斜を呈する状態に据えており、埋置角度は10°を測る。墓は上半部が近代の建物工事に伴う削平により欠失し、豪棺底部のみが残存する。

**【墓壠】** 墓壠は二段掘りとなっている。第一段階として長辺2.4m・短辺1.4mを測る隅丸長方形状に掘り下げた後、第2段階として平坦な墓壠底の南半部をさらに彫刻型に掘り込んでいる。2段目の墓壠は上面で長辺2.24m・短辺1.38m、底部で長辺1.72m・短辺0.81m、深さ0.65mを測る。

**【上棺】** 大型の變形土器で、底部を欠失して不明であるが、本調査や同時期の遺跡出土豪棺例から検討すると、底部は極めて狭小であったことが推定される。胸部は底部から外反しながら胸央部で最大に達し、僅かに頸部へ向かって僅かにすぼまる。肥厚させた口縁は短く外反し、僅かに内側方向へ引き延ばす。口縁端部には板状工具の小口面を押圧させた刻目を上縁部と下縁部とに造らしている。頸部と胸央部にはそれぞれ3条の沈線が巡り、これらの沈線を縱方向4条の沈線で繋いで四区画する。施文は一本の棒状工具によるものである。口径61.2cm、胸部最大径65.2cm、胸部器厚1.2~1.6cmを測る。胎土は1~3mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、暗赤褐色~灰褐色を呈する。焼成は硬質である。

**【下棺】** 大型の變形土器で、底部は狭小で直径12.6cm、器厚3.5cmを測る。胸部は狭小な底部から外反しながら胸央部で最大に達し、僅かに頸部へ向かってすぼまる。口縁は短く外反する。口縁上部に粘土を締ぎ足して肥厚させ、内側方向へ引き延ばしている。口径65.6cm、器高81.2cm、胸部最大径66.6cm、胸部器厚1.0cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、橙灰色~橙褐色を呈する。焼成は硬質である。

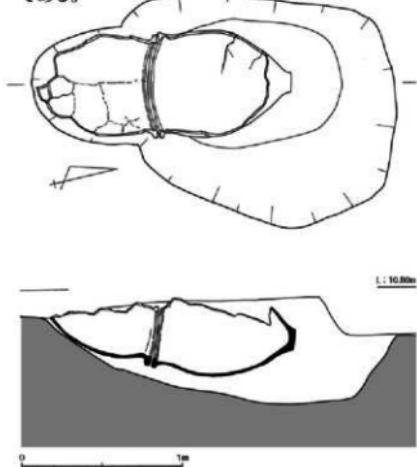


Fig.11 3号豪棺墓SK03実測図 (1/30)

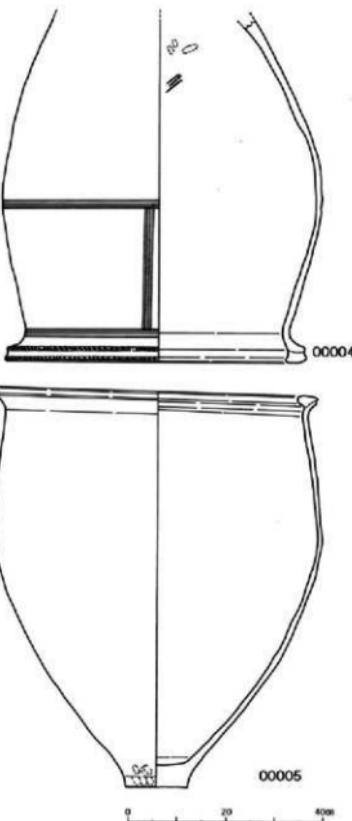


Fig.12 3号豪棺墓豪棺実測図 (1/10)

## 4号喪棺墓SK04 (Fig.6,13,14 PL.6,7,11,21)

**【概 要】**調査区中央部南辺、喪棺墓SK03の北東2.5mに位置する喪棺墓で、弥生時代前半に比定される喪棺墓である。後世の削平により喪棺の上部などを欠失し、喪棺の組み合わせ様式については不明である。墓の主軸は北北東—南南西を呈し、磁北より東へ14°偏する。喪棺の埋置角度は50°を測り、感覚的には縱置き的に据えている。

**【墓 塚】**墓塚は下部のみが残存し、喪の外形に沿った卵形で北北東方向に掘り込んでいる。残存する上面で長径1.05m・短径1.15m、底部で長径0.84m・短径0.35m、深さ0.85mを測る。

**【下 棺】**大型の菱形土器で、底部は狭小で直径13.8cm、器厚2.4cmを測る。胴部は狭小な底部から外反しながら胴尖部で最大に達し、僅かに頸部へ向かってすぼまる。肥厚させた口縁は短く外反し、僅かに内側方向へ引き延ばす。口縁端部にはヘラ状工具による刻目を上縁部と下縁部とに巡らしている。頸部と胴尖部にはそれぞれ3条の沈線が巡り、これらの沈線を袈裟状に縱方向3条の沈線が繋ぐ。施文は一本の棒状工具によるものである。口径70.1cm、器高82.8cm、胴部最大径65.1cm、胴部器厚1.0~1.2cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、灰褐色~赤暗褐色を呈する。焼成は硬質である。

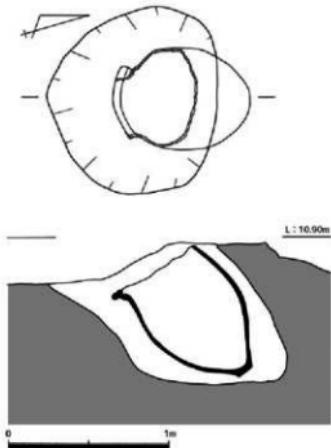


Fig.13 4号喪棺墓SK04実測図 (1/30)

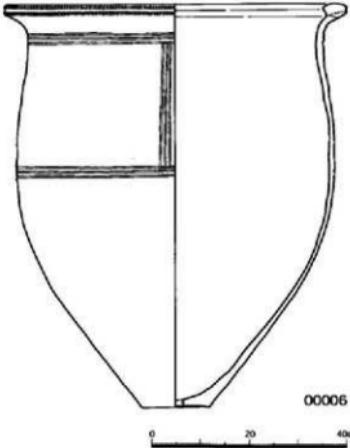


Fig.14 4号喪棺墓喪棺実測図 (1/10)

## 5号腰棺墓SK05 (Fig.5,6,15 PL.12)

【概要】調査区中央部南辺、腰棺墓SK02の西2.5mに位置する腰棺墓である。削平により大半が欠失し、墓壙底と腰棺の一部が残存する。このため腰棺墓の全容は不明であるが、残存する腰棺の状況から弥生時代前期末と推定される。主軸は北北東—南南西を呈し、磁北より東へ28°偏する。埋置角度は計測不可であるが、他の同時期に属する腰棺墓より角度を持たない。

【墓 壙】墓壙は下部のみが残存し、その全容は不明であるが、腰の外形に沿った卵形で北東方向に掘り込んだものと推定される。残存する上面で長径0.80m・短径0.80m、底部で長径0.65m・短径0.65m、深さ0.25mを測る。

【下 棺】大型の腰棺土器であるが、削平により口縁部および底部を欠き全容は不明。器面は刷毛目調整の後にナデて仕上げている。残存する胴部には一本の棒状工具による二本の沈線が巡り、胴部器厚は1.0cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、橙灰色~橙褐色を呈する。焼成は硬質である。

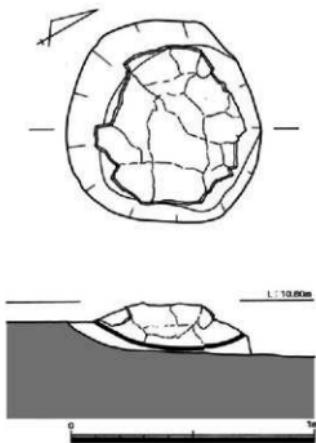


Fig.15 5号腰棺墓SK05実測図 (1/20)

## 6号豪棺墓SK06 (Fig.5,6,16,17 PL.13,22)

**【概要】** 調査区中央部南辺、豪棺墓SK03の西4mに位置する。同規模の大型壺による複棺呑口式の豪棺墓で、弥生時代前期末に比定される。削平により豪棺墓の上半部を欠失している。下棺の壺の口縁は埋時に打ち欠いていたと考えられる。主軸は北北東—南南西を呈し、磁北より東に18°偏する。埋置角度は48°を測る。

**【墓 墓】** 墓壙は下半部のみが残存し、壺の外形に沿った卵形で北北東方向に掘り込んでいる。残存する上面で長径1.04m・短径0.86m、底部で長径0.46m・短径0.54m、深さ0.88mを測る。

**【上 棺】** 大型の壺形土器で底部を欠失して不明であるが、本調査や同時期の遺跡出土豪棺例から検討すると、胸部は極めて狭小な底部から外反しながら胴尖部で最大に達し、僅かに頸部へ向かってすぼまる。肥厚させた口縁は強く外反し、僅かに内側方向へ引き延ばす。口縁端部には板状工具の小口面を押圧させた刻目を上縁部と下縁部とに巡らしている。頸部と胴尖部にはそれぞれ3条の沈線が巡り、これらの沈線を袈裟状に縱方向3条の沈線が繋ぐ。施文は一本の棒状工具によるものである。口径77.8cm、胸部最大径73.8cm、胸部器厚1.0~1.2cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、灰褐色~茶褐色を呈する。焼成は硬質である。

**【下 棺】** 口縁部を打ち欠いているため全容は不明。底部は狭小で直径16.1cm、器厚2.8~3.0cmを測る。胸部は底部から外反しながら胴尖部で最大に達し、僅かに頸部へ向かってすぼまる。胴尖部には2条の沈線が巡る。施文は一本の棒状工具によるものである。胸部最大径68.2cm、胸部器厚1.2~1.6cmを測る。胎土は2~3mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、暗褐色~灰褐色を呈する。焼成は硬質である。

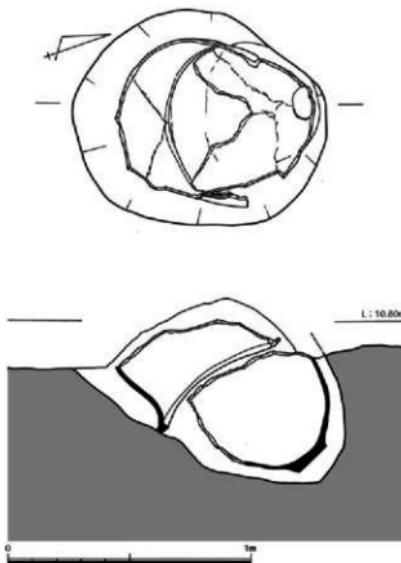


Fig.16 6号豪棺墓SK06実測図 (1/20)

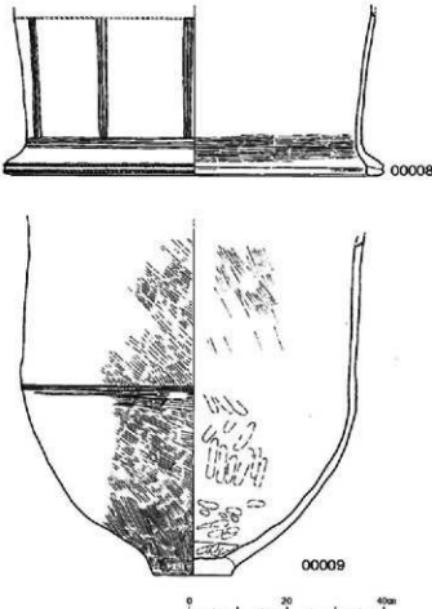


Fig.17 6号豪棺墓豪棺実測図 (1/10)

## 7号喪棺墓SK07 (Fig.5,6,18,19 PL.14,22)

【概要】調査区中央部南辺、喪棺墓SK06の西3mに位置する喪棺墓で、弥生時代前期末に比定され、削平により喪棺墓の上半部が欠失する。上棺に大型鉢、下棺に大型甕を用いた複棺呑口式の喪棺墓である。墓の主軸はほぼ北一南を呈し、磁北より東へ6°偏する。喪棺の埋置角度は47°を測る。

【墓 壁】墓壁は下部のみが残存し、甕の外形に沿った卵形でほぼ北方向に掘り込んでいる。残存する上面で長径1.05m・短径0.85m、底部で長径0.45m・短径0.50m、深さ0.68mを測る。

【上 棺】大型の鉢形土器で底部を欠失して不明であるが、本調査や同時期の遺跡出土喪棺例から検討すると、極めて狭小な底部から直線的に外反しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外湾する。口縁端部は僅かに肥厚させている。このため口縁屈曲部内面には稜線は認められず、丸味を呈す。調整は刷毛目。口径80.6cm、胴部器厚1.1~1.3cmを測る。胎土は1~2mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、灰褐色~茶灰色を呈する。焼成は硬質である。

【下 棺】大型の甕形土器で口縁部を打ち欠いているため全容は不明。底部は狭小で直径16.3cm、器厚3.4cmを測る。胴部は底部から外反しながら胴央部で最大に達し、頸部へ向かって直立する。頸部と胴央部にはそれぞれ3条の沈線が巡り、これらの沈線を製造状に縱方向4条の沈線が繋ぐ。施文は一本の棒状工具によるものである。胴部最大径61.8cm、胴部器厚1.2~1.6cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。焼成は硬質である。

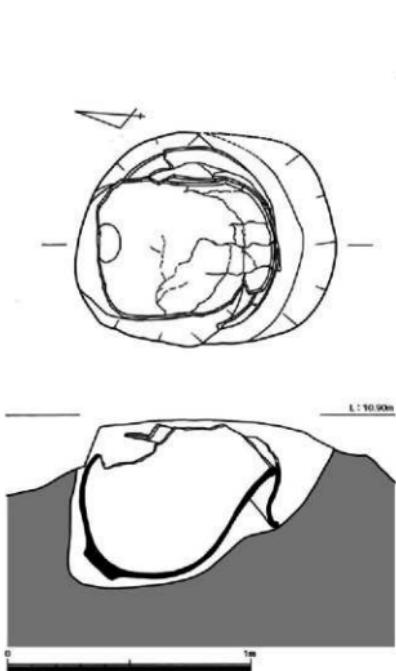


Fig.18 7号喪棺墓SK07実測図 (1/20)

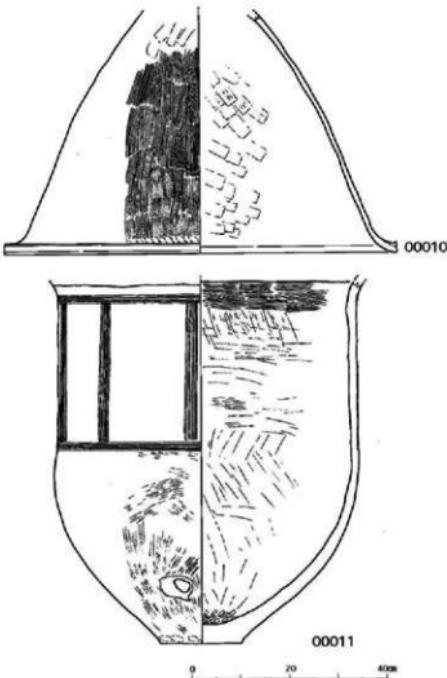


Fig.19 7号喪棺墓下棺実測図 (1/10)

## 8号壺棺墓SK08 (Fig.5,6,20,21 PL.15,22)

【概要】調査区中央部南辺、壺棺墓SK07の西2mに位置する壺棺墓で、弥生時代前期末に比定される壺棺墓である。棺は壺の単棺だけ検出したが、墓壙の痕跡などから複棺接合式もしくは複棺呑口式の壺棺墓の可能性が高い。後世の削平により、壺棺墓の上半部を欠失する。墓の主軸はほぼ北北東—南南西を呈し、磁北より東へ24°偏する。壺棺の埋置角度は9°を測る。

【墓 壕】墓壙は下部のみが残存し、壺の外形に沿った卵形で北北東に掘り込んでいる。残存する上面で長径2.24m・短径1.12m、底部で長径1.08m・短径0.66m、深さ0.45mを測る。

【上 棺】大型の壺形土器で底部を欠失して不明であるが、本調査や同時期の遺跡出土壺棺例から検討すると、底部は極めて狭小であったことが推定される。胴部は底部から外反しながら胴央部で最大に達し、頸部へ向かってほぼ直立する。肥厚させた口縁は短く外反し、上面は平坦で僅かに内側方向へ引き延ばす。口縁端部には板状工具の小口面を押圧させた刻目を上縁部と下縁部とに巡らしている。頸部には3条、胴央部には2条の沈線が巡る。施文は一本の棒状工具によるものである。口径57.9cm、胴部最大径51.8cm、胴部器厚0.9~1.2cmを測る。胎土は1~4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、色調は灰褐色~淡橙灰色を呈する。焼成は硬質である。

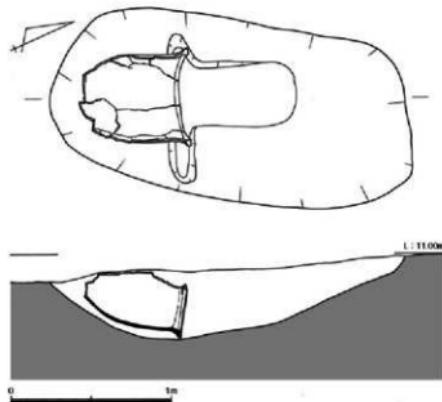


Fig.20 8号壺棺墓SK08実測図 (1/30)

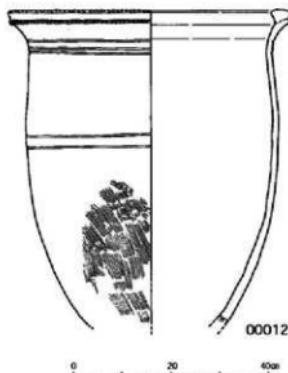


Fig.21 8号壺棺墓壺棺実測図 (1/10)

## 9号豪棺墓SK09 (Fig.5,6,22 PL.16)

**【概要】** 調査区中央部南辺、豪棺墓SK08の東1.2mに位置する弥生時代前期末の複棺豪棺墓である。墓の大半は近代の建物建設工事に伴う削平により消失し、僅かに西半部の一部を残すだけである。このため、上棺を中型の壺型土器、下棺を中型の壺型土器を用いているが全容は不明で、墓の主軸確認も困難である。豪棺の埋置角度も不確定であるが、やや強い傾斜を呈している。

**【墓 壇】** 墓壇は西半部と墓壇底の一部のみが残存している。壺の外形に沿った卵形で掘り込んでいたと推定される。上面で復元長径0.75m・短径0.60m、底部で長径0.25m・短径0.20m、深さ0.51mを測る。主軸は北東—南西を呈すると考えられる。埋置角度は計測不可。

**【上 棺】** 残存する胸部破片から壺型土器と考えられるが、削平により大規模な破壊を受け、全容は不明。器面は、刷毛目調整の後にナデて仕上げている。胸部器厚0.6～0.8cmを測る。胎土は1～4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。焼成は硬質である。

**【下 棺】** 残存する肩部の丸味などから壺型土器と考えられる。削平により大規模な破壊を受け、全容は不明。平坦な底部は直径10cm、器厚1.2cmを測る。胸部は狭小な底部から外反しながら立ち上がるるものと考えられる。器面はヘラ先による磨きで仕上げている。胸部器厚0.8～0.9cmを測る。胎土は1～4mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。焼成は硬質である。

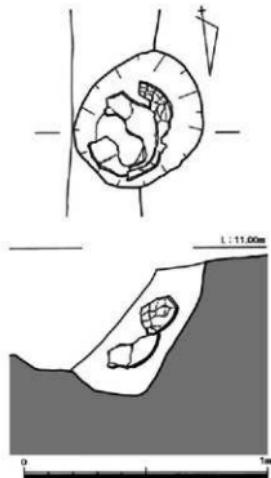


Fig.22 9号豪棺墓SK09実測図 (1/20)

## 10号腰棺墓SK10 (Fig.5,6,23,24 PL.17,22)

【概 要】調査区中央部南辺、腰棺墓SK03の西4.5mに位置する複棺呑口式の腰棺墓で、弥生時代前期末に比定される。削平により腰棺墓の上半部を欠失する。上棺に大型鉢、下棺に大型甕を用いた腰棺墓で墓の主軸は、北東—南西を呈し、磁北より東へ35°偏する。腰棺の埋置角度は58°を測る。

【墓 壇】墓壇は下部のみが残存し、甕の外形に沿った卵形で北東方向に掘り込んでいる。残存する上面で長径1.48m・短径1.26m、底部で長径0.42m・短径0.45m、深さ0.94mを測る。

【上 棺】大型の鉢形土器で底部を欠失して不明であるが、本調査や同時期の遺跡出土腰棺例から検討すると、極めて狭小な底部から直線的に外反しながら立ち上がる。口縁部は僅かに外済しているため口縁屈曲部内面には稜線は認められず、丸味を呈す。口縁部を肥厚させ端部にはヘラ状工具による刻目を上縁部と下縁部とに巡らしている。口縁屈曲部下には幅0.8cm、高さ0.5cmの断面形三角形を呈する一条の凸帯文が巡る。凸帯文は、二条の沈線を巡らした後に線の間に粘土紐を貼り付けて施文している。口径70.5cm、胴部器厚1.2~1.6cmを測る。胎土は2~3mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。焼成は硬質である。

【下 棺】大型の甕形土器で、底部は狭小で直径13.8cm、器厚3.0cmを測る。胴部は狭小な底部から外反しながら胴央部で最大に達し、僅かに頸部へ向かってすぼまる。肥厚させた口縁は短く外反し、僅かに内側方向へ引き延ばす。口縁端部には板状工具の小口面を押圧させた刻目を上縁部と下縁部とに巡らしている。頸部と胴央部にはそれぞれ3条の沈線が巡る。施文は一本の棒状工具によるものである。口径58.8cm、器高69.8cm、胴部最大径54.6cm、胴部器厚1.4~2.4cmを測る。胎土は2~5mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、色調は橙灰色~茶灰色を呈する。焼成は硬質である。

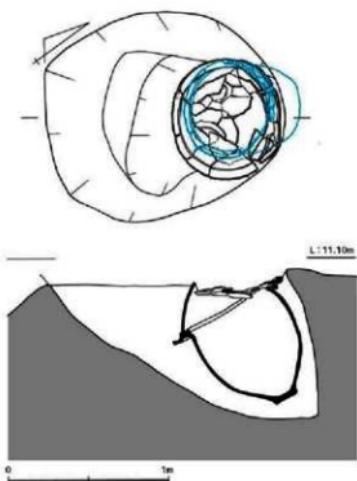


Fig.23 10号腰棺墓SK10実測図 (1/30)

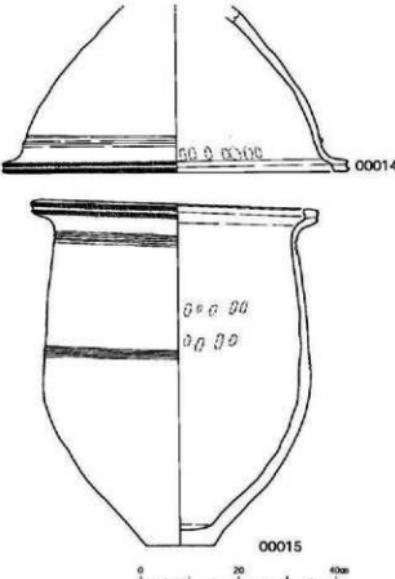


Fig.24 10号腰棺墓腰棺実測図 (1/10)

## 11号壺棺墓SK11 (Fig.6,25,26 PL.18,23)

【概要】調査区中央部南辺、壺棺墓SK10の北3.5mに位置す複棺呑口式の壺棺墓で、弥生時代前期末に比定される。削平により壺棺墓の上半部は欠失する。上・下棺ともに大型窓を用いているが、下棺の窓の口縁は当初から打ち欠いている。墓の主軸は、北北東—南南西を呈し、磁北より東へ20°偏する。壺棺の埋置角度は37°を測る。

【墓 壇】墓壇は下部のみが残存し、壺の外形に沿った卵形で北北東に掘り込んでいる。残存する上面で長径1.82m・短径0.92m、底部で長径0.53m・短径0.38m、深さ0.95mを測る。

【上 棺】大型の壺形土器で底部を欠失して全容は不明であるが、本調査や同時期の遺跡出土壺棺例から検討すると、胸部は狭小な底部から外反しながら胸央部で最大に達し、僅かに頸部へ向かってすぼまる。肥厚させた口縁は強く外反し、僅かに内側方向へ引き延ばす。口縁端部にはヘラ状工具を押し当てた刻目を上縁部と下縁部とに巡らしている。頸部と胸央部にはそれぞれ3条の沈線が巡り、これらの沈線を袈裟状に縱方向4条の沈線が繋ぐ。施文は一本の棒状工具によるものである。口径70.5cm、胸部最大径69.8cm、胸部器厚0.9~1.2cmを測る。胎土は1~3mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、色調は橙灰色~赤褐色を呈する。焼成は硬質である。

【下 棺】大型の壺形土器で口縁部を打ち欠いているため全容は不明。底部は狭小で直径15.1cm、器厚3.7cmを測る。胸部は底部から外反しながら胸央部で最大に達し、頸部へ向かってやや縮まる。頸部と胸央部にはそれぞれ3条の沈線が巡る。施文は一本の棒状工具によるものである。胸部最大径64.1cm、胸部器厚1.0~1.6cmを測る。胎土は1~3mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、色調は淡橙灰色を呈する。器面外面の一部に赤色顔料が残る。焼成は硬質である。

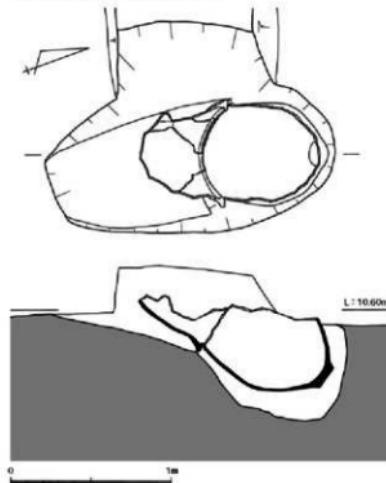


Fig.25 11号壺棺墓SK11実測図 (1/30)

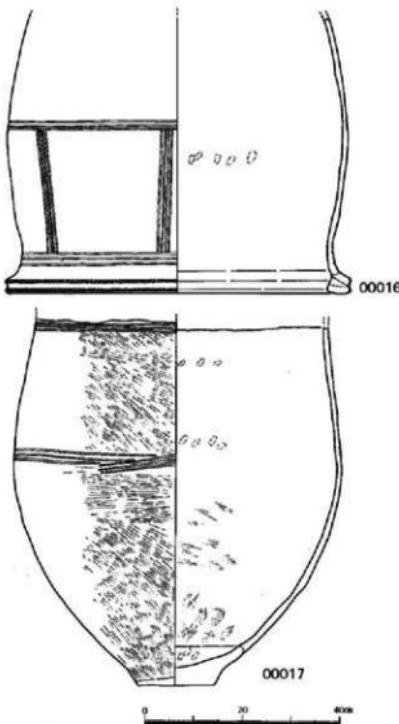


Fig.26 11号壺棺墓壺棺実測図 (1/10)

## 12号腰棺墓SK12 (Fig.6,27,28 PL.19,23)

【概要】調査区中央部南辺、腰棺墓SK11の東4mに位置する複棺接合式の腰棺墓で、弥生時代中期初頭に比定される。削平により腰棺墓の上半部は欠失する。上棺に大型鉢、下棺に大型壺を用いた腰棺墓で、墓の主軸は北一南を呈し、磁北より東へ2°偏する。腰棺の埋置角度は46°を測る。

【墓 壁】下半部のみが残存し、壺の外形に沿った卵形で北方向に掘り込んでいる。残存する上面で長径1.15m・短径0.91m、底部で長径0.65m・短径0.52m、深さ0.65mを測る。

【上 棺】大型の鉢形土器で底部を欠失して不明であるが、本調査や同時期の遺跡出土腰棺例から検討すると、極めて狭小な底部から外反しながら立ち上がる。口縁部はくの字状に折曲している。このため口縁屈曲部内面には強い稜線を呈する。口縁上面部は平坦で、端部にはヘラ状工具による刻目を巡らしている。さらに、口縁屈曲部下には断面形が三角形を呈する2条の凸帯文が巡る。口径64.5cm、胴部器厚0.9~1.2cmを測る。胎土は1~3mmほどの長石・石英砂粒を僅かに含み、色調は赤褐色~茶褐色を呈する。焼成は硬質である。

【下 棺】大型の壺形土器で、底部は狭小で直径13.1cm、器厚3.9cmを測る。胴部は狭小な底部から外反しながら胴央部で最大に達し、僅かに頸部へ向かってすぼまる。口縁部はくの字状に折曲している。このため口縁屈曲部内面には強い稜線を呈する。口縁上面部は平坦で、端部には刻目が上縁部と下縁部とに巡らしているが、一本のヘラ状工具の押圧による。口径67.2cm、器高78.6cm、胴部最大径64.6cm、胴部器厚1.2~1.8cmを測る。胎土は2~3mmほどの長石・石英砂粒を多く含み、赤褐色~茶褐色を呈する。焼成は硬質である。

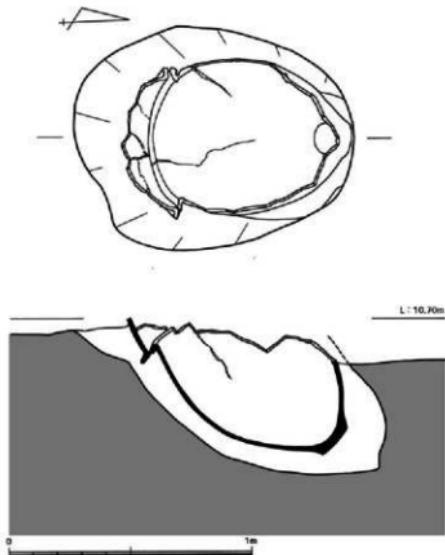


Fig.27 12号腰棺墓SK12実測図 (1/20)

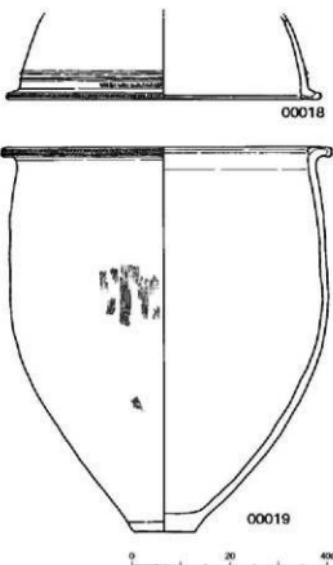


Fig.28 12号腰棺墓腰棺実測図 (1/10)

## (2) 律令時代

遺構としては柵列を一条、総柱掘立柱建物を二棟、それぞれ検出したが、調査地全域が大規模な削平の影響を受けているのは律令時代の遺構も同じで、残存状況は極めて悪く、柱堀形の底部近くしか残っていない。これらの遺構は、本調査地に北接する第102次調査で発見された建物跡等と一連の遺構群を構成するものである。

遺物は極めて少なく、柱堀形から明確な建造時期を示す資料の出土は認められず、柱堀形から弥生時代前期の妻棺の破片が多く出土している。

### 柵SA01 (Fig.29,30,33 PL.24)

調査区中央、掘立柱建物SB01・SB02の東側に位置する。並びは建物の棟筋と同じくし、磁北報告より西に $8^{\circ}30'$ 偏する。柵は三列の掘立柱列からなり、5間分を検出した。柱穴は堀形の平面形が円形もしくは隅丸方形を呈している場合が多く、僅かに梢円形を呈するものも認められる。規模は、堀形の直径もしくは辺長が50cm前後、深さ20~30cmを呈するものが大半を占め、小規模の柱穴は径が30cm、深さ15cmを呈する小穴が僅かに1個ある。柵における柱列間の距離は西側列と中央列との間が0.95~1.10mm、中央列と東側列との間が1.15~1.18mを測る。各柱列における柱間距離は、西側列2.14m、中央列2.13~2.3m、東側列2.13m~2.58mを測る。この柱間距離には規則性が認められないよう見えるが、各列の柱間距離はほぼ同じであることから、東西方向に並ぶ3本の柱が一組になっていることを知る。

掘立柱建物SB01・SB02との柱穴芯芯間距離は、西側列で3.42~3.7m、中央列で4.54~4.62m、東側列で5.62~5.8mを測る。

### 掘立柱建物SB01 (Fig.29,31,33 PL.25,26)

調査区の西半部中央、掘立柱建物SB02の北に位置する梁行3間×桁行3間の総柱建物である。建物東側の柱穴には一部が後世の攪乱で欠失しているが、建物規模は梁行4.32×桁行5.85mと復元できる。柱間は梁行1.41~1.46m、桁行1.85~1.93mを測る。

柱堀形は、一部の柱穴が削平により完全消失もしくは柱痕跡のみ残存しているものの、平面形が円形もしくは梢円形を呈し、直径もしくは辺長が70~110cm前後、深さ24~60cmを呈する。柱痕跡は、径35~50cmを測る円形で、柱堀形の壁近くに位置する場合が多い。

建物の棟筋は磁北より西に $8^{\circ}30'$ 偏する。

### 掘立柱建物SB02 (Fig.29,32,33 PL.25,26)

調査区の西半部中央、掘立柱建物SB01の南に位置し、建物の一部は調査区外に広がるが、梁行3間×桁行3間の総柱建物が推定される。建物規模は、SB01と同規模の梁行4.32×桁行5.85mと推定される。柱間が梁行1.42~1.43m、桁行1.91mを測る。

柱堀形は、一部が削平により完全消失もしくは柱痕跡のみ残存しているものの、平面形が円形もしくは隅丸方形を呈し、直径もしくは辺長が85~110cm前後、深さ11~23cmを呈する。柱痕跡は径38~42cmを測る円形で、柱堀形の壁近くに位置する場合が多く、中央に位置するのは少ない。

建物の棟筋はSB01と同じくし、磁北より西に $8^{\circ}30'$ 偏する。

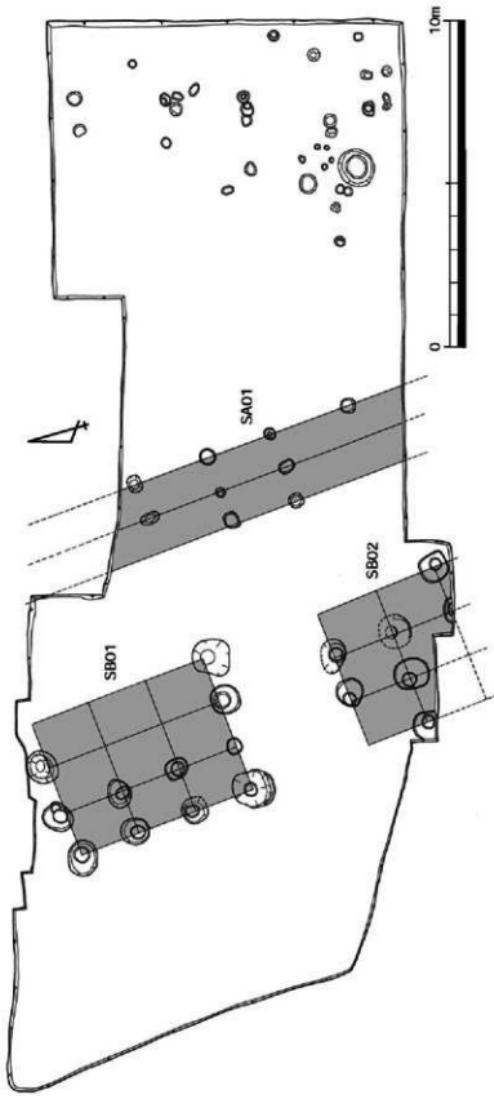


Fig.29 律令時代墓地圖 (1/150)

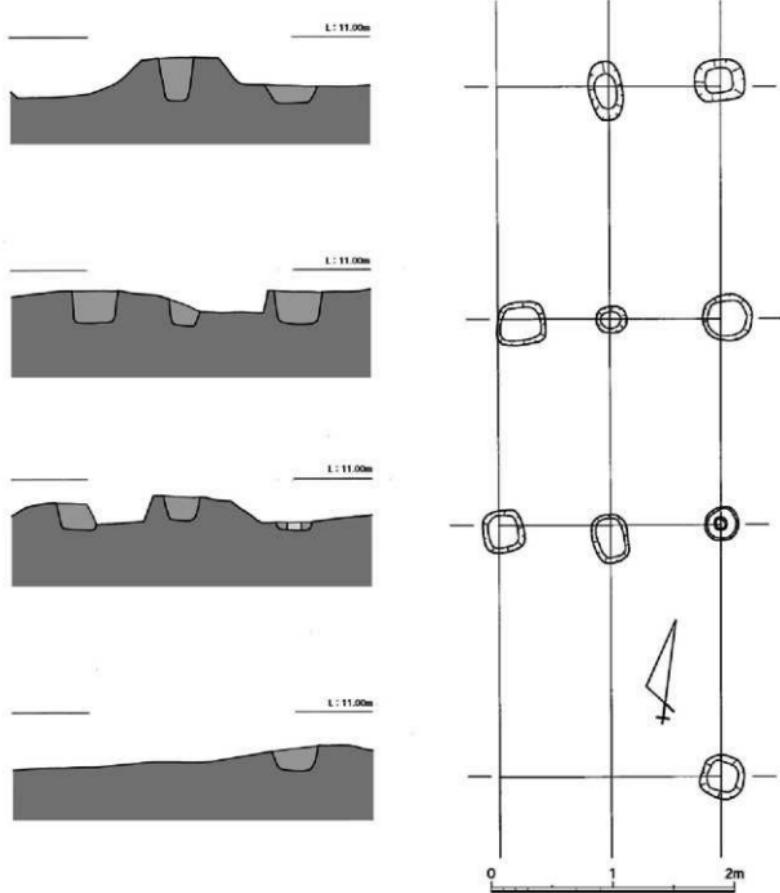


Fig.30 塚SA01実測図 (1/40)

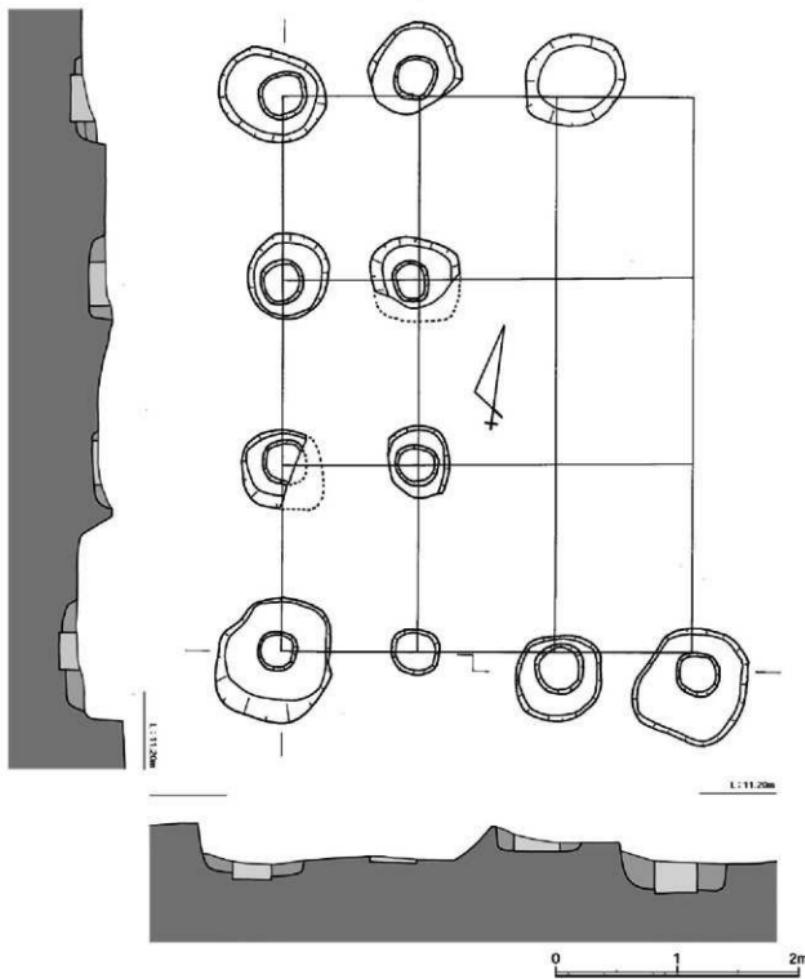


Fig.31 捩立柱建物SB01実測図 (1/40)

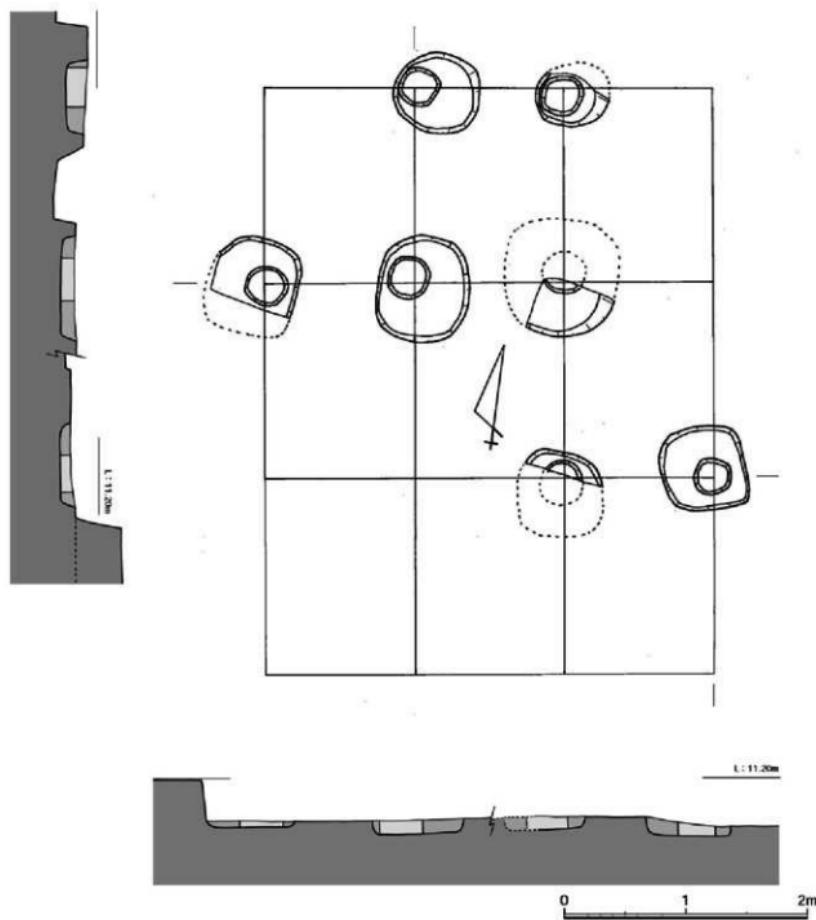


Fig.32 挿立柱建物SB02実測図 (1/40)

## 第IV章 小 結

有田遺跡群における調査も200回を超え、発見された遺構や遺物も縄文時代から近世の多種多様を呈する状況は、時代を超えた有田・小田部台地の有する地政学的優位性を示すものに他ならない。各時代の遺構などについては既刊報告書において詳細な検討がなされていることから、本章ではこれまでの調査成果を踏まえた上で本調査地を含む周辺の弥生時代と律令時代について歴史的環境復元を行い、今後の周辺調査における検討課題を探るものである。

### 1. 弥生時代における遺構

本調査地の位置する地形は、第II章でも若干述べたが、旧地形は現況と大いに異なる丘陵地形であったと推定される。このことは、本次調査や周辺調査における遺構の残存状況が極めて悪いことからも周辺地域が大規模な削平を伴う造成事業が実施されていたことを容易に知りうる。今回の調査では弥生時代前期末を中心とした12基の甕棺墓と1基の木棺墓を検出したが、以前の家屋改築時に数基の甕が出土したという地権者の供述や古代の遺構から出土した甕棺の破片量などから、調査地を含む周辺地域には弥生時代の大規模な甕棺墓群が存在していた可能性は極めて高い。したがって、今後の周辺地域におけると調査においては留意する必要がある。

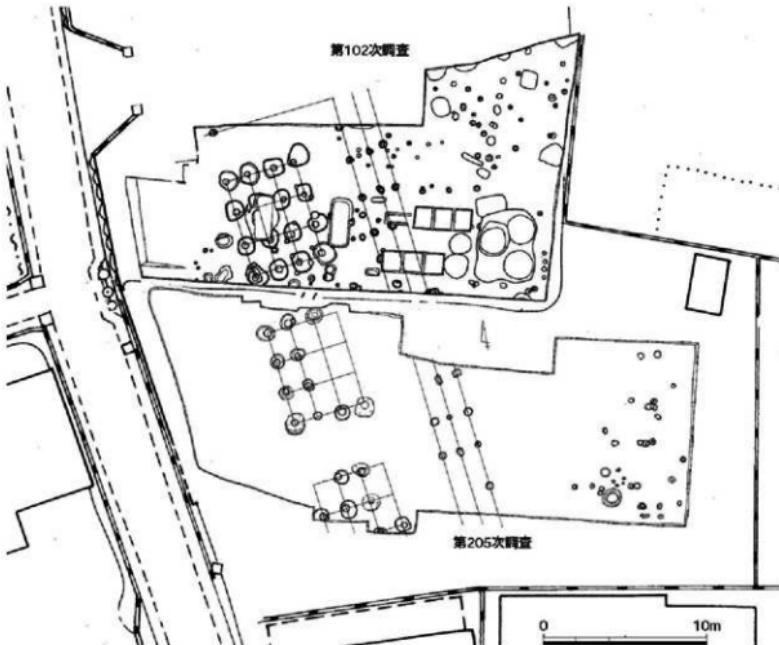


Fig.33 建物・壙配置復元図 (1/300)

## 2. 律令期における遺構

有田・小田部丘陵南半部中央には第189次調査で確認された早良群庁の中心施設である掘立柱建物群をはじめ、塀で囲まれた総柱掘立柱建物群が集中して存在している。他方、北半部丘陵においても本次調査を含む同様な状況を看ることができるが、その配置や構造には南半部丘陵との差異が認められる。これは時期的な差の反映なのかは今後の調査に期待したい。

### 【有田遺跡群関係調査報告書】

- 有田古代遺跡発掘調査概報 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集 1967年  
 有田遺跡～福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告～福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集 1967年  
 有田周辺遺跡調査概報 福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集 1977年  
 有田・小田部 第1集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集 1980年  
 有田・小田部 第2集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集 1980年  
 有田・小田部 第3集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集 1982年  
 有田七田前遺跡～往住小学校建設に伴う理蔵文化財調査報告～福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集 1983年  
 有田・小田部 第4集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983年  
 有田・小田部 第5集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集 1984年  
 有田・小田部 第6集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集 1985年  
 有田遺跡群～第81次調査～福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集 1986年  
 有田・小田部 第7集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 1986年  
 有田・小田部 第8集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集 1987年  
 有田・小田部 第9集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集 1988年  
 有田・小田部 第10集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集 1989年  
 有田・小田部 第11集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集 1990年  
 有田・小田部 第12集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集 1991年  
 有田・小田部 第13集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第265集 1991年  
 有田・小田部 第14集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集 1991年  
 有田・小田部 第15集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第307集 1992年  
 有田・小田部 第16集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第308集 1992年  
 有田・小田部 第17集 ～第160・169次調査～福岡市埋蔵文化財調査報告書第399集 1993年  
 有田・小田部 第18集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第340集 1993年  
 有田・小田部 第19集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集 1994年  
 有田・小田部 第20集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第378集 1994年  
 有田・小田部 第21集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第426集 1995年  
 有田・小田部 第22集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第427集 1995年  
 都道遺跡(4)～有田遺跡群第167次調査報告～福岡市埋蔵文化財報告書第434集 1995年  
 有田・小田部 第23集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第470集 1996年  
 有田・小田部 第24集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第471集 1996年  
 有田・小田部 第25集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第472集 1996年  
 有田・小田部 第26集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第473集 1996年  
 有田・小田部27～有田遺跡群第178次調査報告～福岡市埋蔵文化財調査報告書第512集 1997年  
 有田・小田部28～有田遺跡群第175次・177次・179次調査報告～福岡市埋蔵文化財調査報告書第513集 1997年  
 有田・小田部 第29集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第538集 1997年  
 有田・小田部 第30集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第547集 1998年  
 有田・小田部31～有田遺跡群第181次・184次調査報告～福岡市埋蔵文化財調査報告書第574集 1998年  
 有田・小田部32～有田遺跡群第188次調査報告～福岡市埋蔵文化財調査報告書第608集 1999年  
 有田・小田部33～有田遺跡群第189次の調査～福岡市埋蔵文化財調査報告書第649集 2000年  
 有田・小田部 第34集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第651集 2000年  
 有田・小田部35～第182次・186次・187次・190次・192次・193次～福岡市埋蔵文化財調査報告書第657集 2000年  
 有田・小田部 第36集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第684集 2001年  
 有田・小田部 第37集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第725集 2002年  
 有田・小田部38～有田遺跡群第202次調査～福岡市埋蔵文化財調査報告書第735集 2003年  
 有田・小田部39 福岡市埋蔵文化財調査報告書第784集 2004年

図 版  
PLATES



調査地周辺航空写真（1947年 昭和22年）



調査地周辺航空写真（1964年 昭和39年）



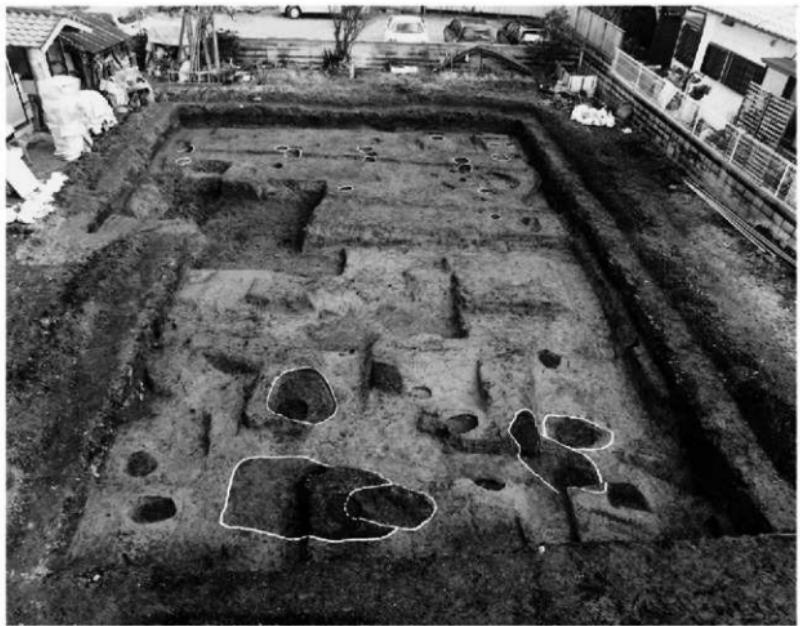
調査地周辺航空写真（1972年 昭和47年）



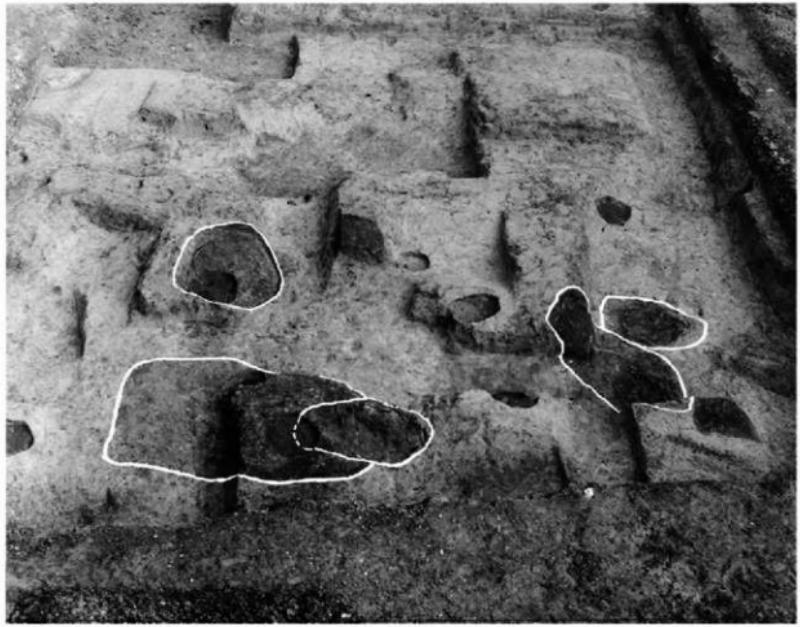
調査地周辺航空写真（1981年 昭和56年）



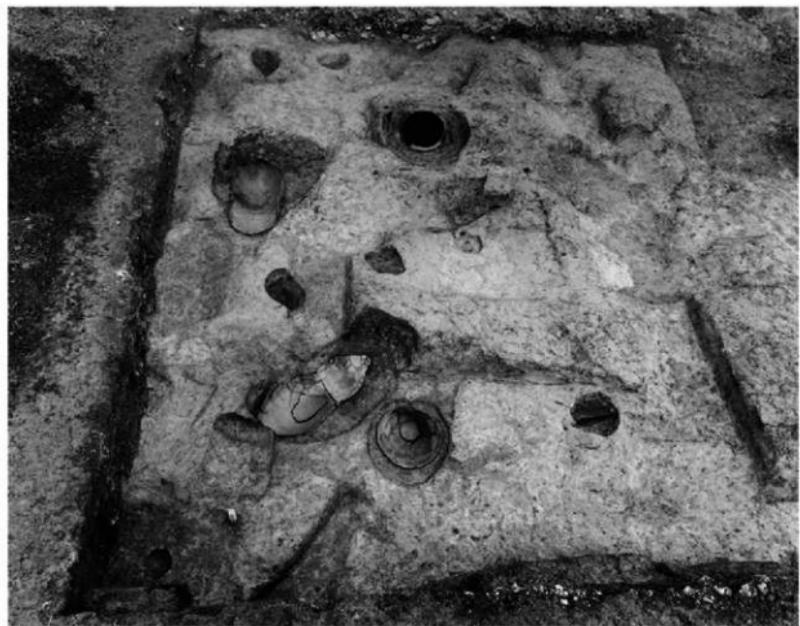
調査地周辺航空写真（2001年 平成13年）



(1) 第Ⅰ調査区全景(西から)



(2) 第Ⅰ調査区発棺墓検出状況(西から)



(1) 第Ⅰ調査区廻棺墓廻棺検出状況（南から）



(2) 第Ⅰ調査区廻棺墓廻棺検出状況（西から）



(1) 1号壺棺墓SK01検出状況（南東から）



(2) 1号壺棺墓SK01検出状況（南東から）



(3) 1号壺棺墓SK01検出状況（南東から）



(1) 2号壺棺墓SK02検出状況（南東から）



(2) 2号壺棺墓SK02壺棺検出状況（南東から）



(3) 2号壺棺墓SK02墓壙検出状況（南東から）



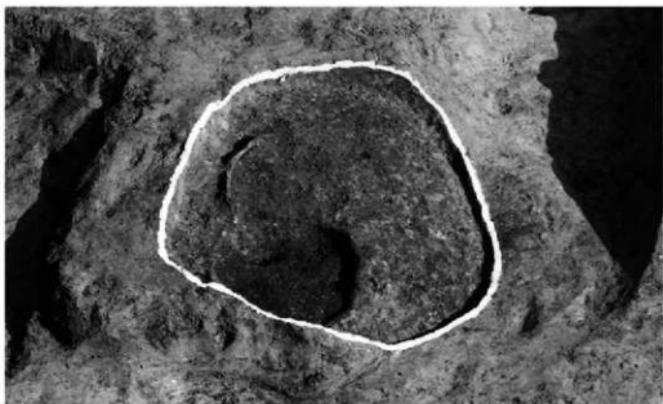
(1) 3号窓棺墓SK03検出状況（東から）



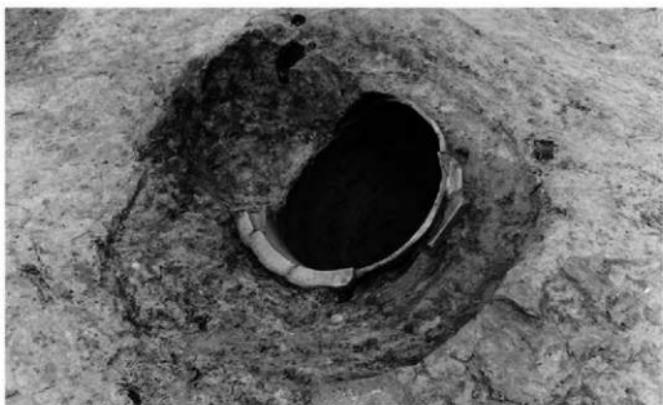
(2) 3号窓棺墓SK03窓棺検出状況（東から）



(3) 3号窓棺墓SK03墓壙検出状況（東から）



(1) 4号喪棺墓SK04検出状況（東から）



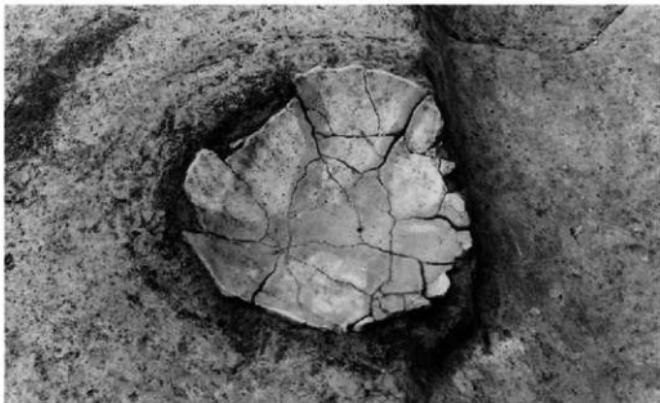
(2) 4号喪棺墓SK04検出状況（東から）



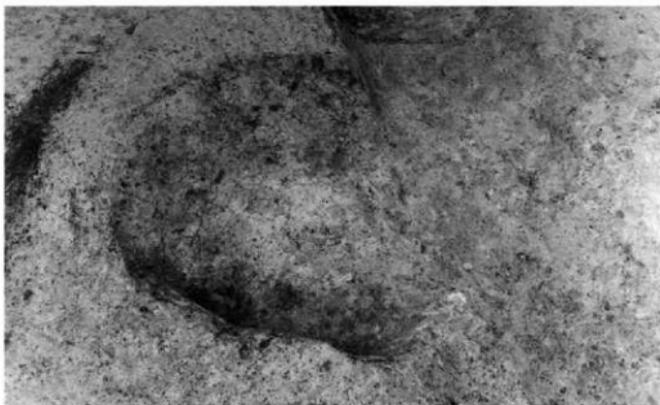
(3) 4号喪棺墓SK04検出状況（東から）



(1) 5号甕棺墓SK05検出状況（南東から）



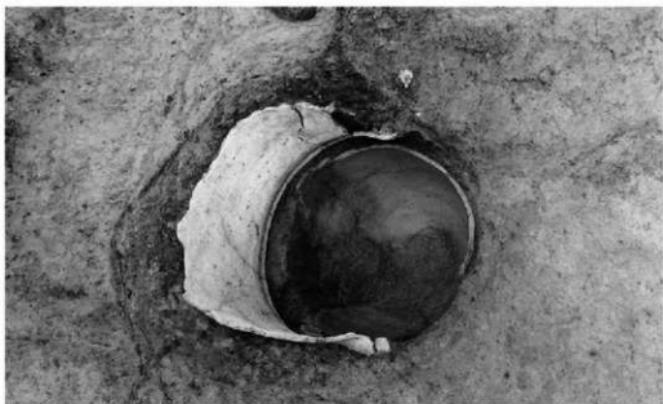
(2) 5号甕棺墓SK05甕棺検出状況（南東から）



(3) 5号甕棺墓SK05墓壙検出状況（南東から）



(1) 6号甕棺墓SK06検出状況（東から）



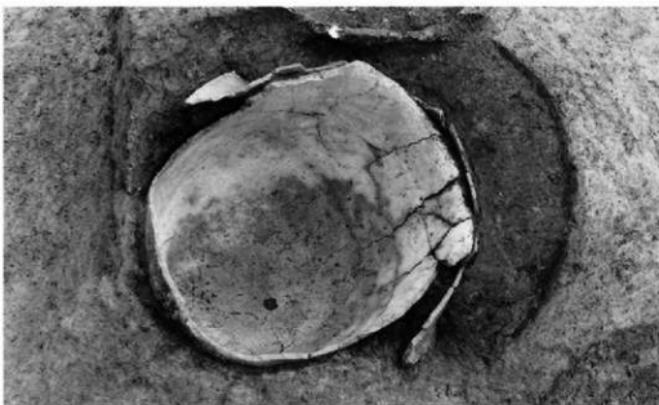
(2) 6号甕棺墓SK06甕棺検出状況（東から）



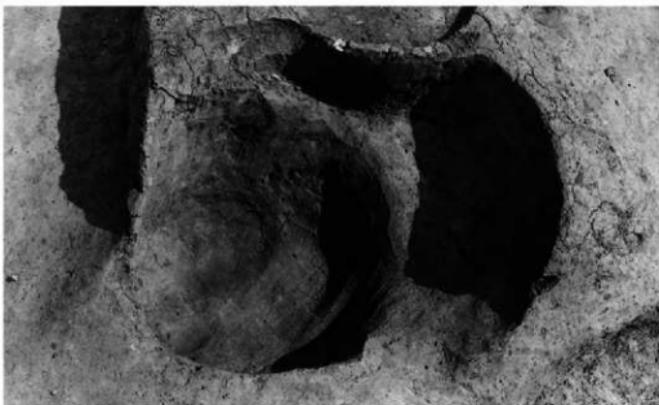
(3) 6号甕棺墓SK06墓壇検出状況（東から）



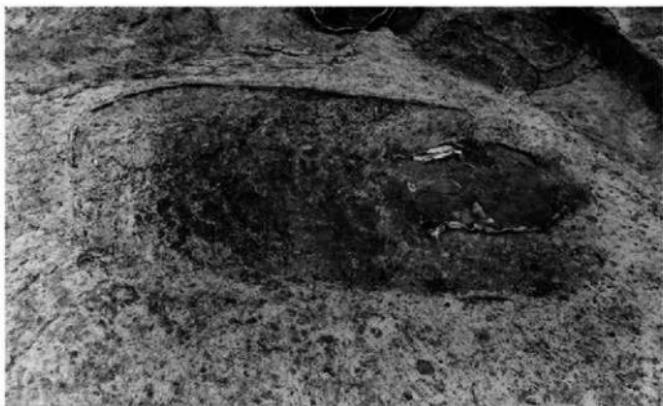
(1) 7号窯棺墓SK07検出状況（西から）



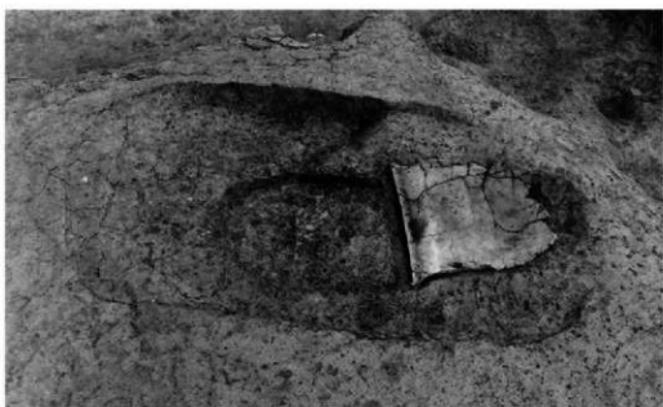
(2) 7号窯棺墓SK07蓋棺検出状況（西から）



(3) 7号窯棺墓SK07基壇検出状況（西から）



(1) 8号甕棺墓SK08検出状況（北西から）



(2) 8号甕棺墓SK08甕棺検出状況（北西から）



(3) 8号甕棺墓SK08墓壙検出状況（北西から）



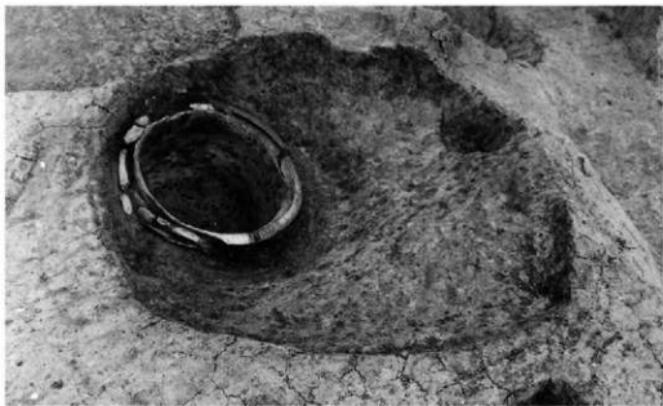
(1) 9号窯棺墓SK09検出状況（東から）



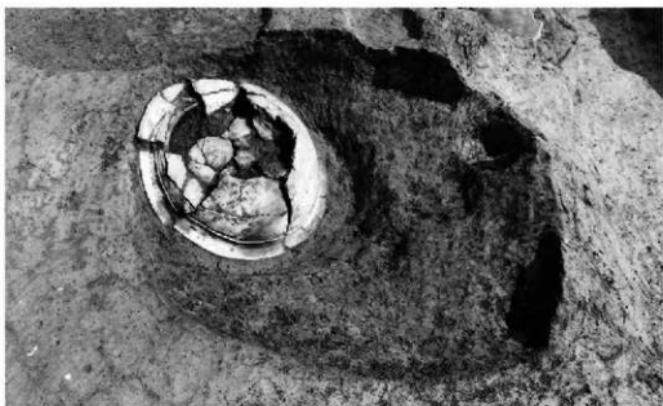
(2) 9号窯棺墓SK09検出状況（東から）



(3) 9号窯棺墓SK09基壇検出状況（東から）



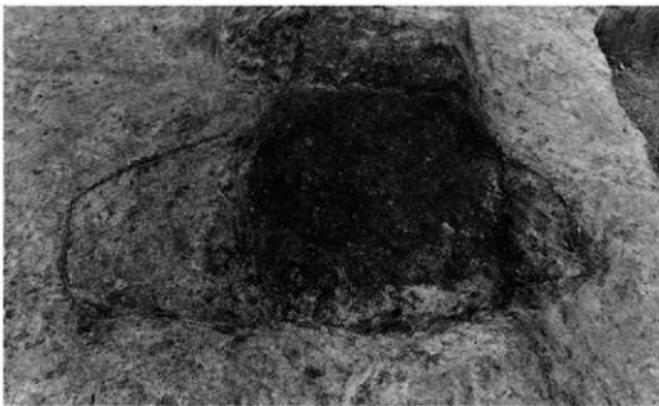
(1) 10号窓棺墓SK10検出状況（北西から）



(2) 10号窓棺墓SK10窓棺検出状況（北西から）



(3) 10号窓棺墓SK10墓壙検出状況（北西から）



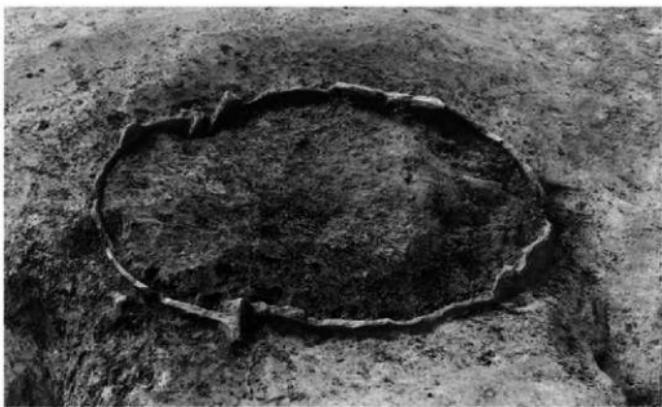
(1) 11号妻棺墓SK11検出状況（東から）



(2) 11号妻棺墓SK11検出状況（東から）



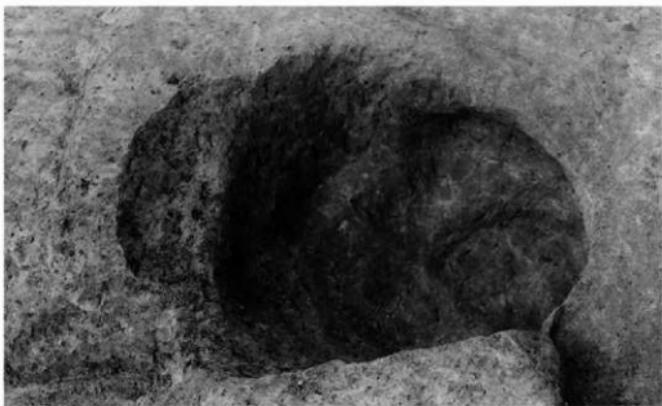
(3) 11号妻棺墓SK11検出状況（東から）



(1) 12号壺棺墓SK12検出状況（東から）



(2) 12号壺棺墓SK12壺棺検出状況（東から）



(3) 12号壺棺墓SK12墓壙検出状況（東から）



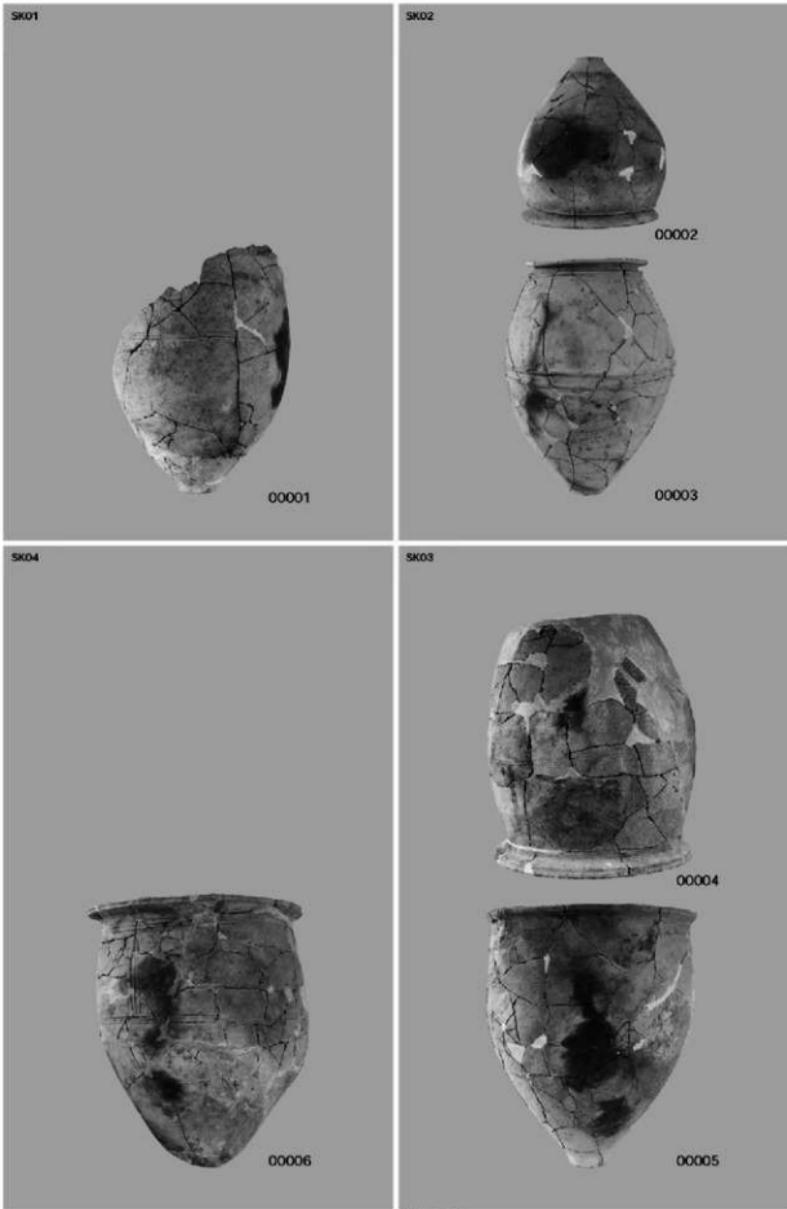
(1) 1号木棺墓SK13検出状況（南から）



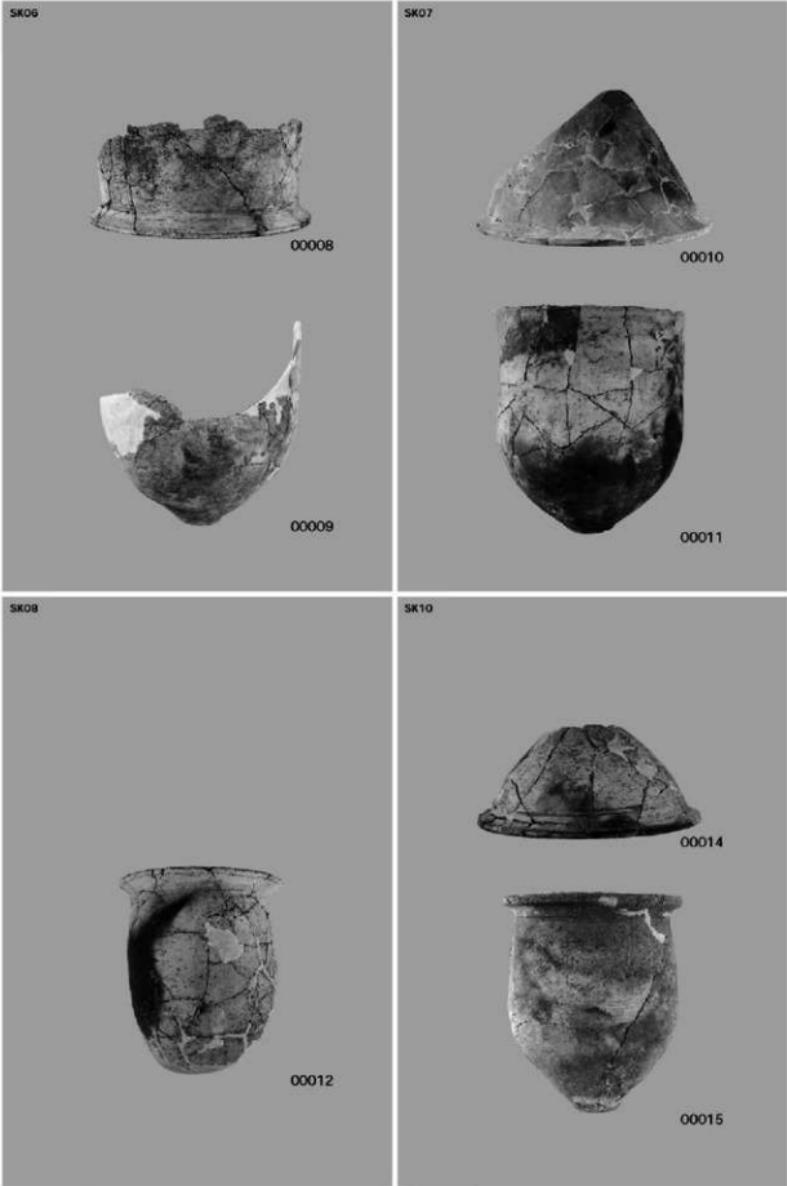
(2) 1号木棺墓SK13木棺検出状況（東から）



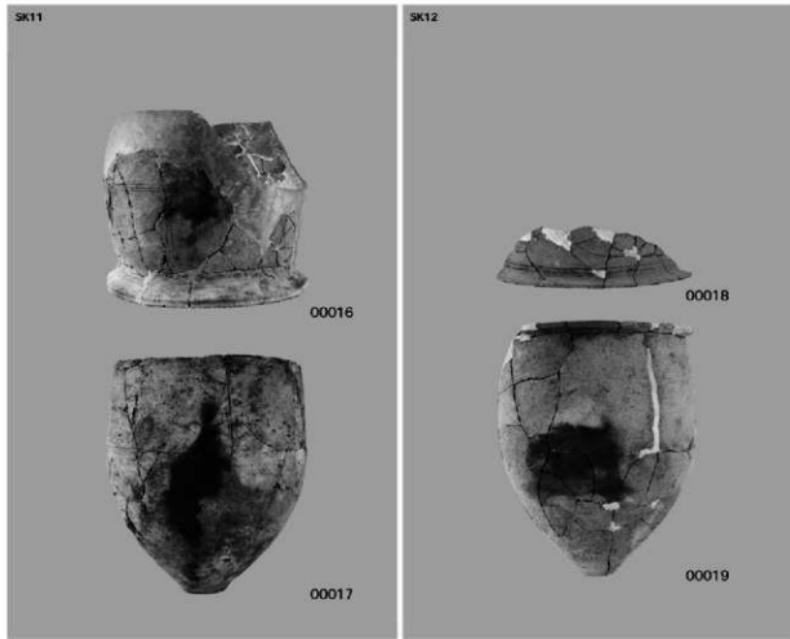
(3) 1号木棺墓SK13木棺検出状況（南から）



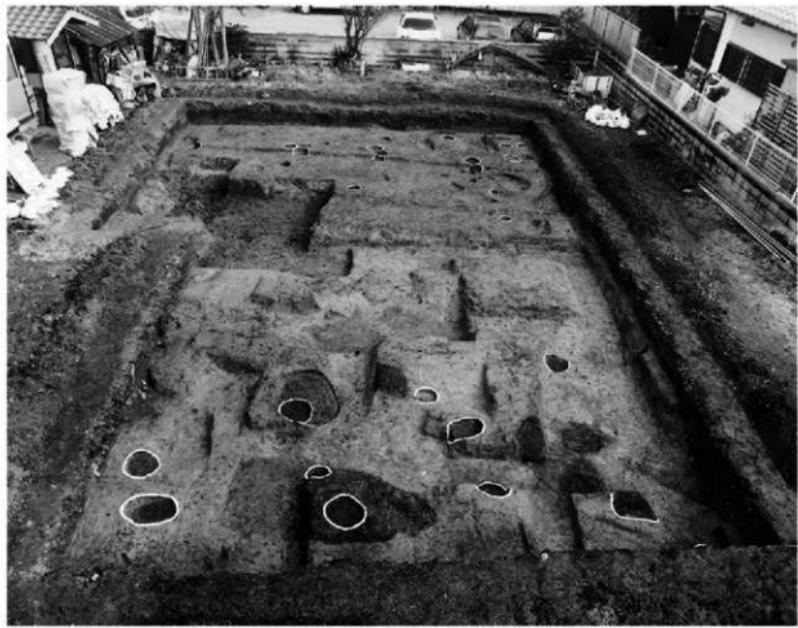
1~4号壺棺基壺棺



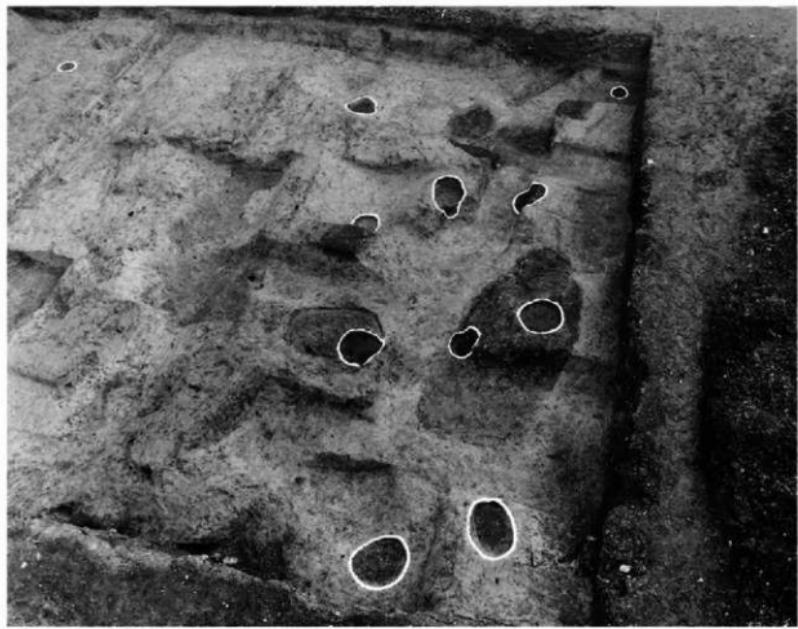
6~8・10号窯墓窯棺



11・12号甕棺墓甕棺



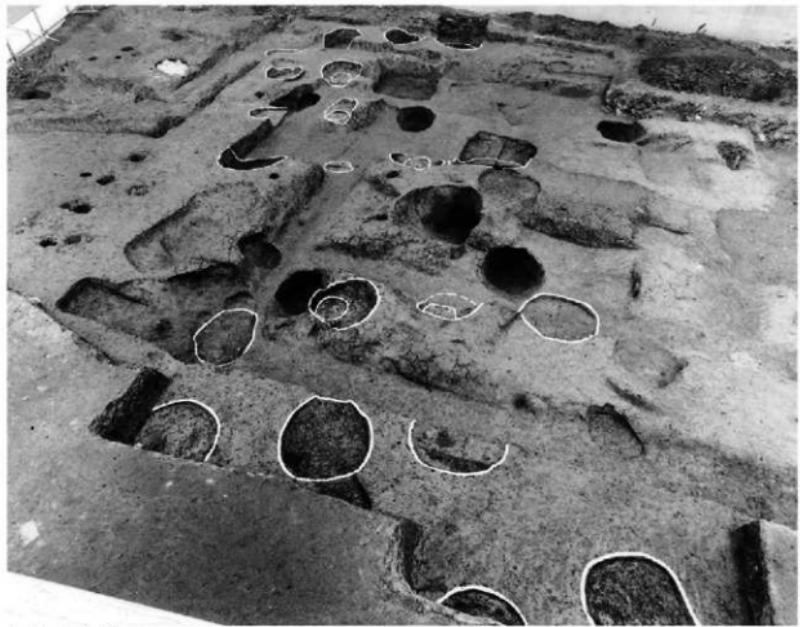
(1) 第Ⅰ調査区全景（西から）



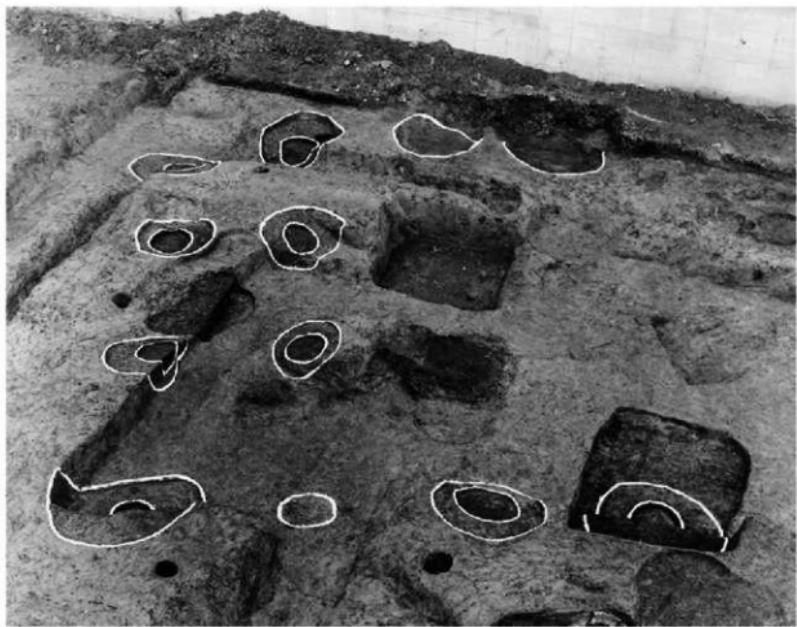
(2) 框列SA01検出状況（北から）



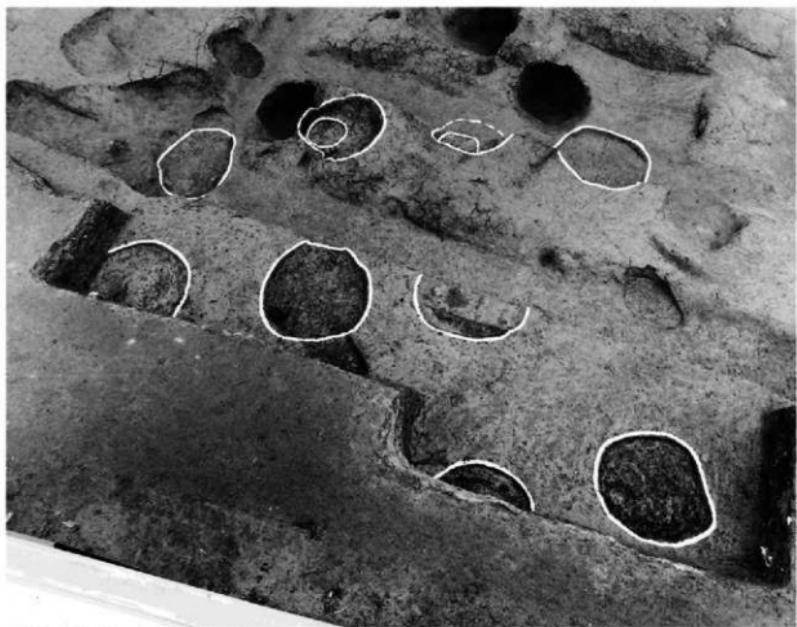
(1) 挖立柱建物SB01-02検出状況（東から）



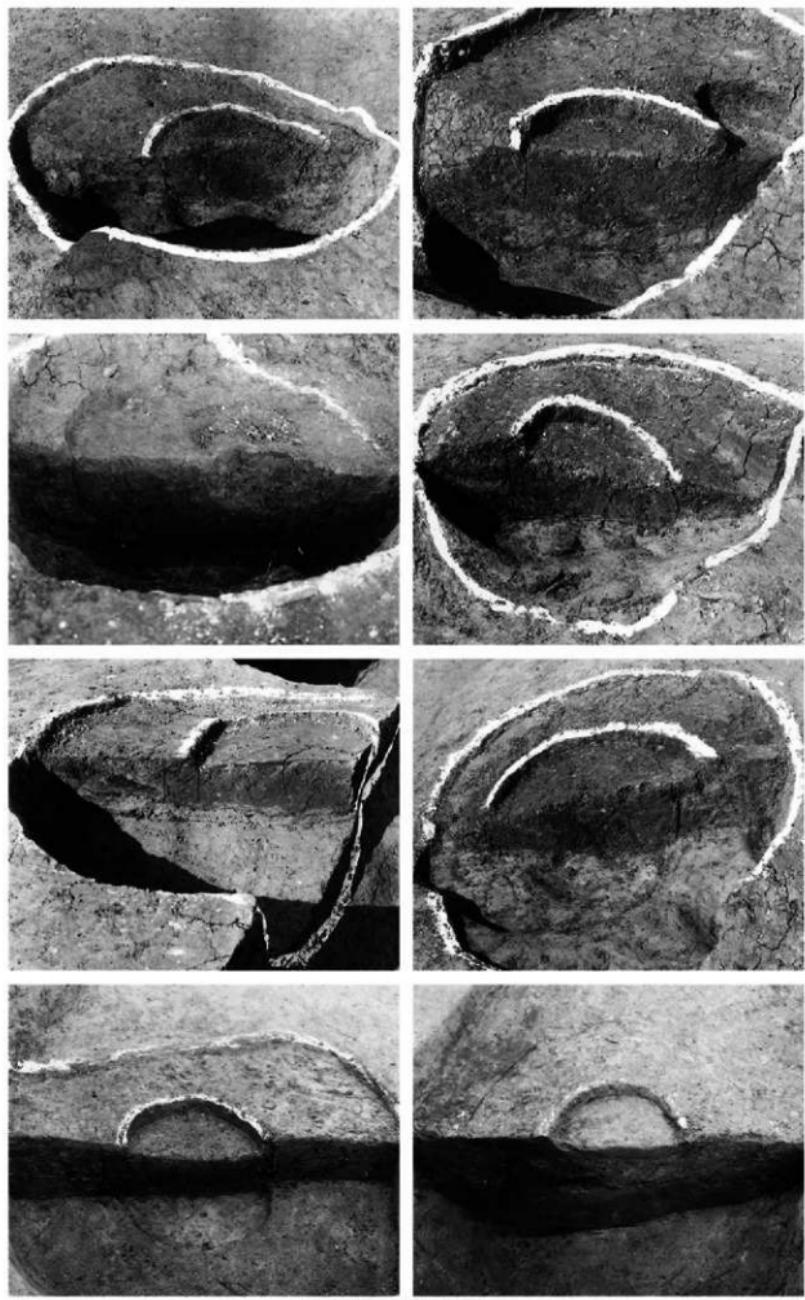
(2) 挖立柱建物SB01-02検出状況（南から）



(1) 掘立柱建物SB01検出状況（南から）



(2) 掘立柱建物SB02検出状況（南から）



掘立柱建物SB01柱穴半裁状況

## 報告書抄録

書名ふりがな	ありた こたべ		
書名	有田・小田部 40		
副書名	有田遺跡群第205次調査報告書		
卷次	40		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	869		
編者名	瀧本正志		
著者名	瀧本正志		
編集機関	福岡市教育委員会(埋蔵文化財課)		
発行機関	福岡市教育委員会		
機関所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号		
発行年月日	20060331		
遺跡名ふりがな	ありたいせきぐん		
遺跡名	有田遺跡群	北緯(日本測地系)	333349
所在地ふりがな	ふくおかげんふくおかしさわらくこたべ	東經(日本測地系)	1302009
遺跡所在地	福岡県福岡市早良区小田部二丁目155-1,158	北緯(世界測地系)	333400
市町村コード	40130	東經(世界測地系)	1302000
遺跡番号	20309	調査期間	20030120~20030221
調査原因	自宅付共同住宅建設	調査面積	346m <sup>2</sup>
種別	墳墓 宮衛		
主な時代	弥生時代前期~後期 古墳時代~飛鳥時代		
主な遺構	竪棺墓12基、木棺墓1基、掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、小穴		
主な遺物	弥生土器		
特記事項	竪棺墓群、掘立柱建物群		

## 有田・小田部 40

— 有田遺跡群第205次調査報告書 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第869集

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

TEL092(711)4667

発行日 平成18年(2006)3月31日

印刷 廉和印刷株式会社

福岡市博多区東那珂1-15-1

# ARITA SITE 40

THE REPORT OF THE 205 TH ARCHAEOLOGICAL EXACAVATIONS  
OF THE ARITA SAITES  
IN FUKUOKA, JAPAN



March 2006  
FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION